

東京国立文化財研究所要覧

1977

昭和 52 年度

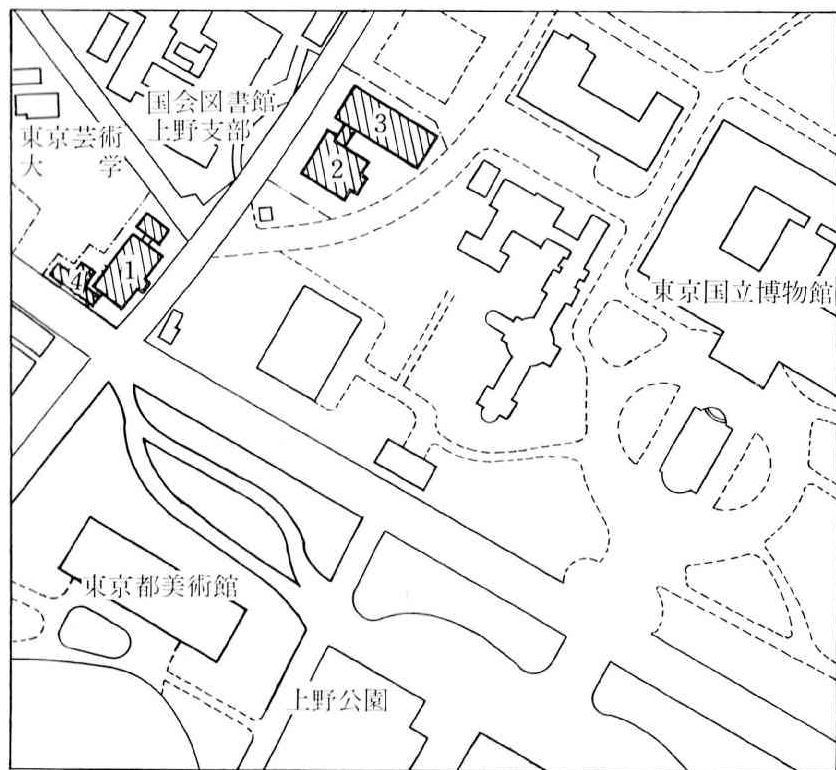


東京国立文化財研究所本館・情報資料部研究棟



東京国立文化財研究所別館

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎
4. 情報資料部庁舎

は　じ　め　に

昭和52年度東京国立文化財研究所要覧を上梓するに当たり、まず記さねばならないのは、関野克所長が昭和53年4月1日付けで退官され、したがってこの年度が実質上関野所長へ最後の年度となったことである。顧りみると関野先生は、昭和27年新設された保存科学部長として当研究所に関係されたのを最初とし、さらに昭和40年からは13年間にわたり所長としての重責を担われたのであって、研究所と共に歩まれること通算四半世紀を越え、その間研究所の発展に寄与されること絶大であった。ここに満腔の敬意と謝意を表したい。また中村伝三郎美術部第二研究室長も同じく4月1日付で勇退された。氏もまたその生涯を研究所のためにささげられたのである。いまその功勞をたたえ、感謝の言葉を送りたい。

さて、昭和52年度には情報資料部の独立があった。今や研究部の数は5部を数え、機構として一般の強化が図られたわけである。しかも情報資料部研究棟の新営工事も行われ、年度末には竣工をみた。しかし研究部の充実は一朝にしてできることではない。所員一同のたゆまぬ努力で今後一層発展することを期している。

調査研究面では、美術部・芸能部が3カ年実施した特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合研究」が終了、一方保存科学部・修復技術部による「石造文化財の保存修復に関する科学的研究」が3カ年計画の特別研究として開始された。前者にはその成果の公表を推進し、後者に対しては、そのテーマが文化財保存の緊急課題に密着するものであることを認識し、着実に前進するようにしたい。

最後に事業面で特筆すべきは、黒田清輝巡回展と文化財保存及び修復に関する国際研究集会との発足である。前者は研究所創設の由緒をふまえたものとして意義深く、後者は明日の文化財問題を追求する企てとして世界の注目を集めた。ともに今後の継続発展を期している。

最後に、これを機会に、新任所長としての心からなる御挨拶を送るとともに、研究所に対し今後とも変らぬ御厚情を賜うようお願いしたい。

昭和53年12月

東京国立文化財研究所長 伊藤延男

目 次

I 沿 革	1
1 設 立 の 経 緯	1
2 年 表	1
3 歴 代 所 長	5
II 設立目的と機構	6
1 機 構	6
2 職 種 別 予 算 定 員	7
3 職 員	8
III 土地・建物	10
1 建物の面積・構造一覧	10
2 建物の平面図	11
IV 予 算	16
1 歳 出 予 算	16
2 科 学 研 究 費	16
V 調 査 研 究	18
1 美 術 部	18
(1) 概 要	18
(2) 研究調査活動	19
A 一般研究	19
B 特別研究	22
C 科学研究費	23
2 芸 能 部	23
(1) 概 要	23
(2) 研究調査活動	26

A 一般研究	26
B 特別研究	28
C 科学研究費	29
3 保存科学部	30
(1) 概 要	30
(2) 研究調査活動	31
A 一般研究	31
B 特別研究	36
C 受託研究	37
D 科学研究費	38
4 修復技術部	40
(1) 概 要	40
(2) 研究調査活動	41
A 一般研究	41
B 特別研究	45
C 受託研究	45
D 科学研究費	46
5 情報資料部	47
(1) 概 要	47
(2) 研究調査活動	48
A 一般研究	48
B 科学研究費	49
6 主要研究業績	51
7 その他の研究活動	64
8 学位授与	65
VI 事業	66
1 出 版	66
(1) 美術研究	66

(2) 芸術の科学	66
(3) 保存科学	67
(4) その他の出版物	68
2 黒田清輝巡回展	70
3 公開学術講座	71
4 会 議	71
5 国際交流	75
VII 研究施設・設備	79
1 蔵 書	79
2 資 料	80
3 機器・設備	81
4 黒田記念室	85
5 閲覧室	85
VIII 旧 職 員	86
IX 関係法規	87

Ⅰ 沿 革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また我が国美術上の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうへは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した。

同 3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品

治 革

を陳列した。

同 4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。

同 7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5ヶ年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同 年4月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7月～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市内牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

承家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

同22年5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。これが保存科学部の前身である。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。

同 24年4月 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

昭和25年9月15日、文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

同26年1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年8月29日から適用）

同27年4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ、移転した。

同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護

沿 革

委員会規則第1号), 東京国立文化財研究所となった。

同32年3月28日 東京国立博物館構内に木造, 外部鉄網モルタル塗, 平家建, $8m^2$ の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし, 増築分延面積 $71m^2$ が竣工した。

同34年4月30日 国立文化財研究所研究受託規程(文化財保護委員会告示第14号)が定められ, この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され(昭和36年文化財保護委員会規則第1号), 従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として, 鉄筋コンクリート造2階建延面積 $663m^2$ の建物1棟が竣工した。

同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され(昭和37年文化財保護委員会規則第1号), 新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年7月20日 芸能部研究室は, 保存科学部庁舎の竣工に伴い, 旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され(昭和43年法律第99号), 本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延 $1,950.41m^2$)の起工式が行われた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので, 同年5月26日竣工式が行われた。

同45年4月22日 芸能部は, 別館3階に移転した。

同45年5月8日 保存科学部は, 別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し, 同年10月15日工事が終了した。

同 年11月2日 所長及び庶務課は, 本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

(本館は, 美術部庁舎となる。)したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」に変更された。

同46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地 $2,658m^2$ を東京国立博物館から所管

換された。

同48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され(昭和48年文部省令第6号) 新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され(昭和52年文部省令第10号) 情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日 本館構内の写場等(木造平家建延面積144㎡)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95㎡の建物が竣工した。

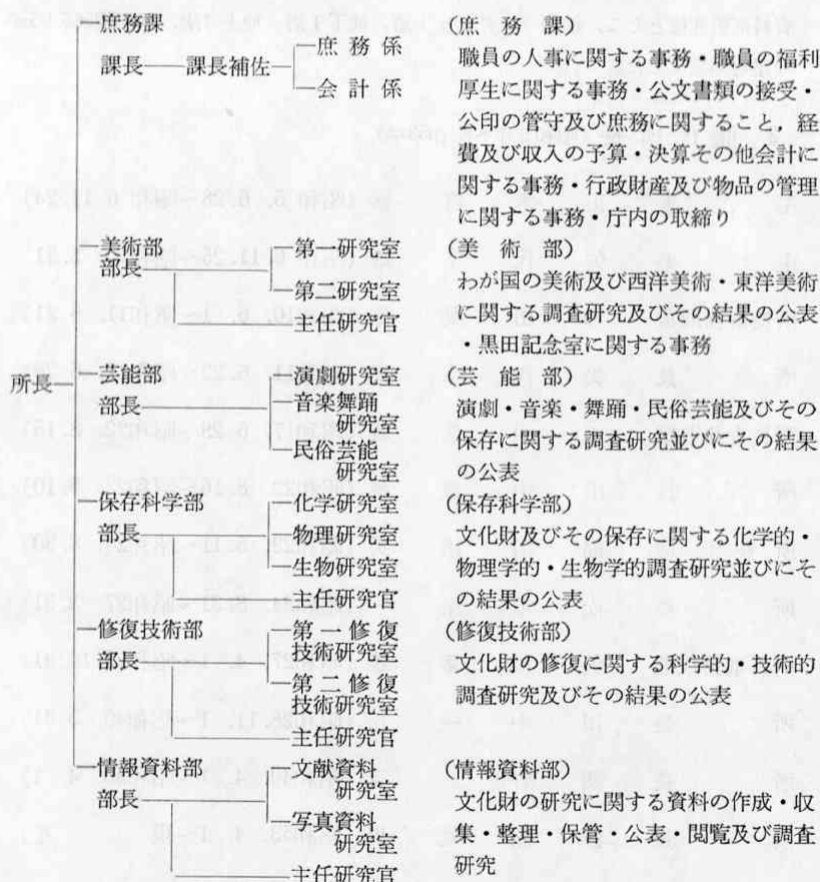
3 歴代所長(昭和5年～昭和53年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～現 在)

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行うことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	51 年 度	52 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職	11	11
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	1	1
一 般 職 員	3	3
研 究 職	35	35
部 長 等 研 究 員	10	11
室 長 等 研 究 員	13	12
研 究 員	12	12
合 計	47	47

設立目的と機構

3 職 員

昭和53年3月30日現在

所	属	官 職 名	氏 名
所 庶	長 課	文 部 技 官, 所 長	関 野 克
		文 部 事 務 官, 庶 務 課 長	松 原 尚
		文 部 事 務 官, 庶 務 課 長 補 佐	鶴 見 耕
	係	文 部 事 務 官, 庶 務 係 長	本 田 多
		文 部 事 務 官, 庶 務 係 員	松 本 賀
	係	文 部 事 務 官, 会 計 係 長	斎 藤 朗
		文 部 事 務 官, 会 計 主 任	鈴 木 彦
		文 部 事 務 官, 会 計 係 員	正 藤 生
		文 部 技 官, 作 業 員	小 澤 ま
		事 務 補 佐 員	杉 浦 どり
		”	伊 藤 ひ
		技 能 補 佐 員	豊 田 三
		作 業 補 佐 員	大 塚 正
美 術	部	文 部 技 官, 美 術 部 長	川 上
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	関 田 千
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	田 村 悦
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	柳 澤 和
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	猪 川 実
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	田 実 鉄
		文 部 技 官, 主 任 研 究 官	陰 里 鉄
	第 一 研 究 室	文 部 技 官, 第 一 研 究 室 長	久 野
		文 部 技 官, 研 究 員	関 口 正
	第 二 研 究 室	文 部 技 官, 第 二 研 究 室 長	中 村 三
芸 能	部	文 部 技 官, 芸 能 部 長	三 隅 治
	演 劇 研 究 室	文 部 技 官, 演 劇 研 究 室 長	佐 藤 道
		文 部 技 官, 研 究 員	羽 田
		調 査 研 究 員 (非)	松 本
	音 楽 舞 踊 研 究 室	文 部 技 官, 音 楽 舞 踊 研 究 室 長	柿 木 吾
		文 部 技 官, 研 究 員 (併)	横 道 萬
		調 査 研 究 員 (非)	山 本 宏
	民 俗 芸 能 研 究 室	民 俗 芸 能 研 究 室 長 事 務 取 扱	三 隅 治 雄

設立目的と機構

所 属	官 職 名	氏 名	
保 存 科 学 部	文 部 技 官, 研 究 員	中 村 茂 子	
	調査研究員(非)	仲 井 幸 二 郎	
	文 部 技 官, 保存科学部長	江 井 本 義 理 子	
	文 部 技 官, 主任研究官	見 本 城 敏 子	
	化 学 研 究 室	文 部 技 官, 化学研究室長	馬 瀧 久 夫
	文 部 技 官, 研 究 員	門 倉 武 夫	
	物 理 研 究 室	文 部 技 官, 物理研究室長事務取扱	江 本 義 理 郎
	文 部 技 官, 研 究 員	石 川 陸 定 俊	
	文 部 技 官, 研 究 員	三 浦 井 井	
	生 物 研 究 室	文 部 技 官, 生物研究室長	新 森 英 八 郎
修 復 技 術 部	調査研究員(非)	西 川 杏 太 郎	
	文 部 技 官, 修復技術部長	西 里 川 杏 太 郎	
	文 部 技 官, 主任研究官	西 里 川 杏 太 郎	
	第 一 修 復 技 術 研 究 室 長 事務取扱	西 浦 忠 輝	
	文 部 技 官, 研 究 員	青 木 繁 夫	
	文 部 技 官, 研 究 員	青 木 繁 夫	
	文 部 技 官, 専門職員	茂 木 口 清	
	第 二 修 復 技 術 研 究 室 長	樋 田 勝 彦	
	文 部 技 官, 研 究 員	増 関 野 次 男	
	情 報 資 料 部	情報資料部長事務取扱	宮 上 野 次 男
文 献 資 料 研 究 室	文 部 技 官, 主任研究官	宮 上 野 次 男	
	文 部 技 官, 文 献 資 料 研 究 室 長	江 上 田 武 良	
	文 部 技 官, 研 究 員	鶴 河 野 昭 夫	
	文 部 技 官, 研 究 員	河 野 倉 迪 夫	
	文 部 技 官, 研 究 員	米 倉 野 次 男	
	写 真 資 料 研 究 室 長 事務取扱	関 橋 本 弘	
	文 部 技 官, 専門職員	橋 本 弘	
	文 部 技 官, 専門職員	市 川 和 昌	
	文 部 技 官	野 久 保 正 良	
	文 部 技 官	野 久 保 正 良	

Ⅲ 土地・建物

本研究所の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室及び別館である。

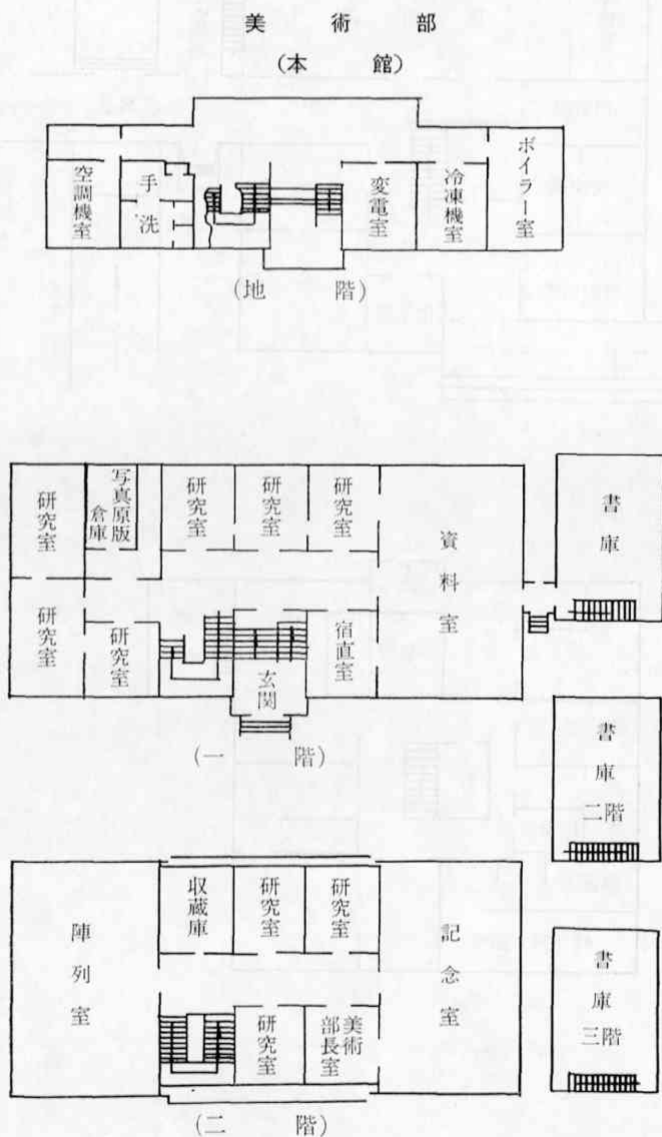
土地は、本館の敷地1,457㎡保存科学部実験室及び別館の2,658㎡敷地の計4,115㎡である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

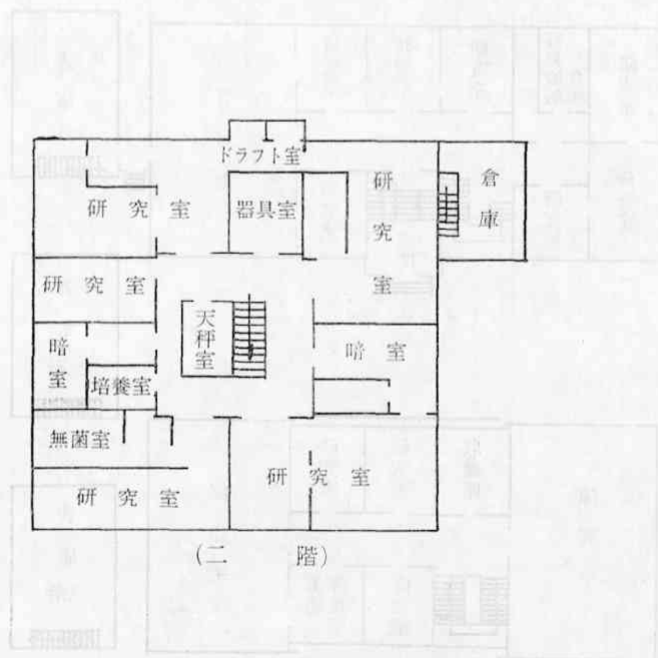
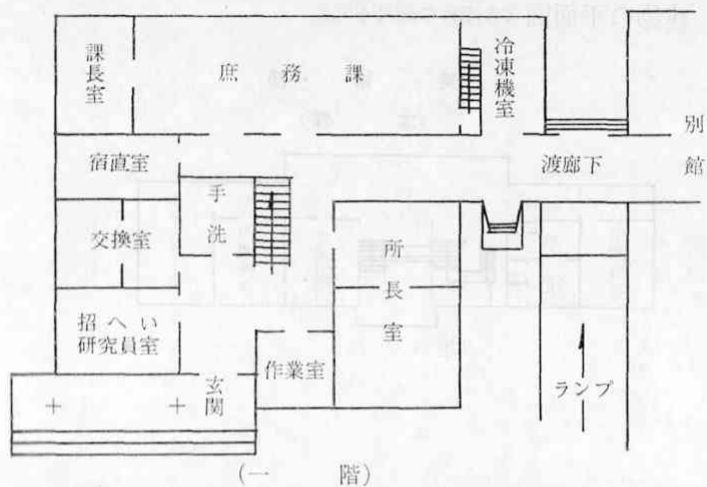
1 建物の面積・構造一覧

No.	名 称	種目・ 構 造	建面積 延面積	建 築 年月日	No.	名 称	種目・ 構 造	建面積 延面積	建 築 年月日
1	本 館	事務所建 RC. 地上 2階・地 下1階	$\frac{468.26}{1,192.72}$ ㎡	昭 3. 8.30	5	別 館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$ ㎡	昭 45. 3.25
2	書 庫	倉 庫 建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	昭 10. 1.25 (32.11.30) (3階増築)	6	渡廊下 (別館)	雑 屋 建 鉄 骨 造 平 家	$\frac{27.60}{26.60}$	〃
3	渡廊下 (書庫)	雑 屋 建 RC. 平家	$\frac{4.90}{4.90}$	昭 10. 1.25	7	情報資料 部研究棟	事務所建 RC. 地下 1階地上 3階	$\frac{175.06}{565.95}$	昭 53. 3.20
4	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.44}{684.91}$	昭 37. 3.28					

2 建物の平面図（各庁舎の縮尺不同）

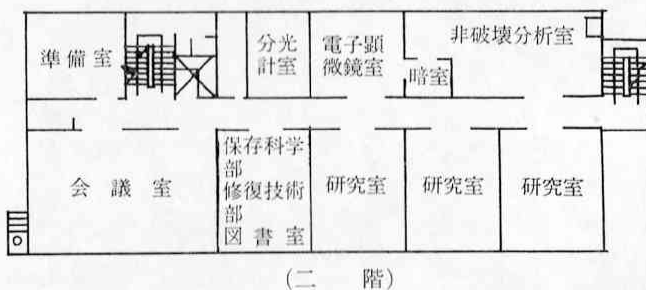
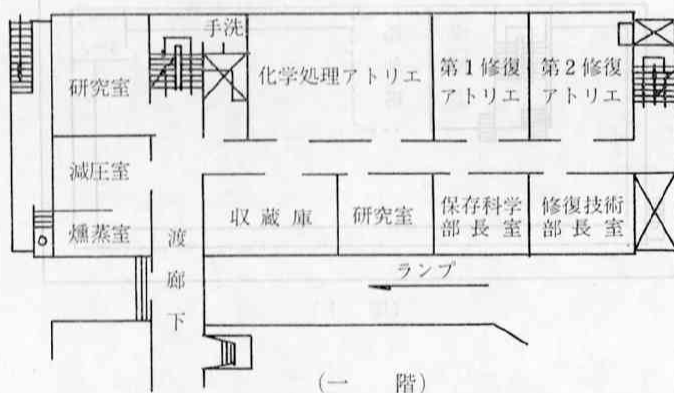
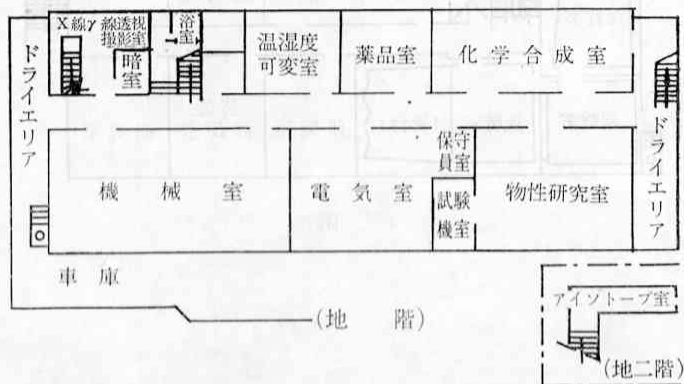


庶務課・保存科学部（実験室）

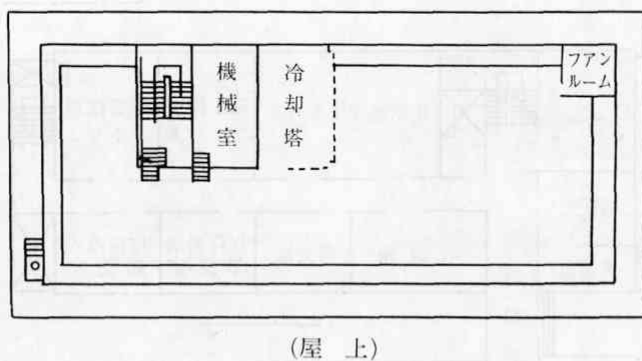
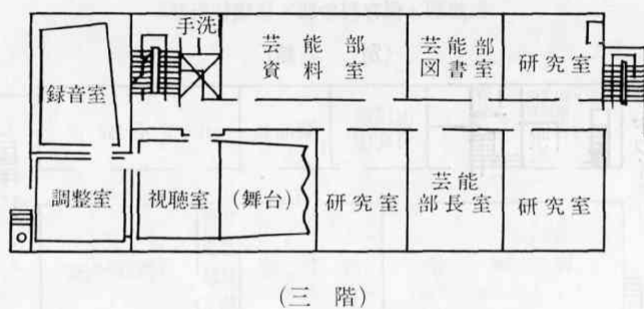


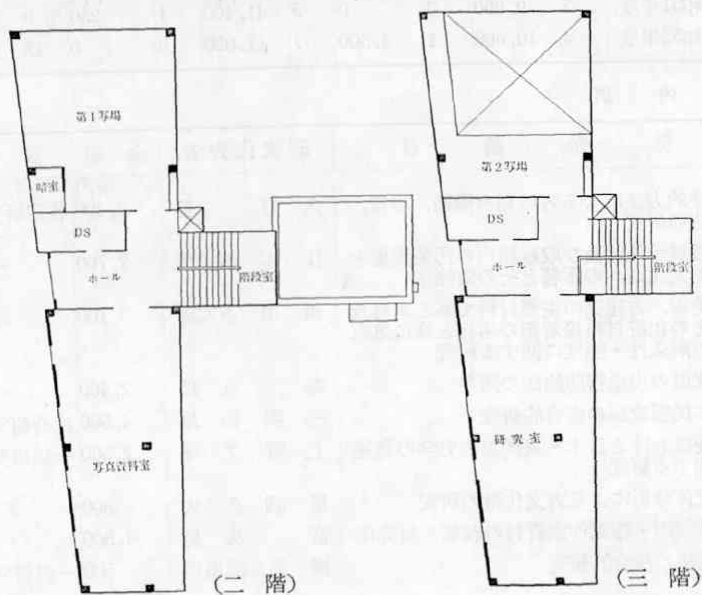
芸術部・保存科学部・修復技術部

(別 館)



土地・建物





Ⅳ 予 算

1 歳出予算

注（ ）内は補正後予算を示す。

区 分	人 件 費	物 件 費	施 設 費	合 計
	千円	千円	千円	千円
昭 和 51 年 度	(196,740) 201,909	(71,828) 72,917	(16,810) 16,810	(285,378) 291,636
昭 和 52 年 度	(221,464) 246,192	(84,254) 85,953	(104,000) 104,000	(409,718) 436,145

2 科学研究費

区 分	特 定 研 究		総 合 研 究		一 般 研 究		奨 励 研 究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
		千円		千円		千円		千円		千円
昭和51年度	3	9,900	0	0	5	41,400	1	250	9	51,550
昭和52年度	4	10,600	1	4,500	7	11,090	0	0	12	26,190

内 訳

研 究 題 目	研究代表者	金 額	摘 要
科学的方法による古彫刻の構造、材質、技法の研究	久 野 健	千円 2,400	特定研究(1)
新設展示施設及び収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法	江 本 義 理	2,700	〃
古美術、古建築の主要材料である木材及びその化粧材料接着剤の劣化と修復処置後の耐久性・強度に関する研究	西 川 杏 太 郎	3,100	〃
文化財の虫被害防除法の開発	森 八 郎	2,400	〃
日本民謡歌詞の総合的研究	三 隅 治 雄	4,500	総合研究(A)
戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究	上 野 ア キ	2,500	一般研究(A)
同位体分析による古文化財の研究	馬 淵 久 夫	500	〃
中世絵画・彫刻作家資料の収集と研究能	宮 次 男	4,800	〃
楽技法の総合的研究	横 道 萬里雄	500	一般研究(B)

予 算

研 究 題 目	研究代表者	金 額	摘 要
採幽縮図の研究	河 野 元 昭	千円 2,000	一般研究(C)
経巻・絵巻・冊子等の料紙に対する打壁 技法の再現研究	増 田 勝 彦	350	一般研究(D)
土壌の物理的性質の横穴古墳内温湿度に およぼす影響に関する研究	三 浦 定 俊	440	"

V 調査研究

1 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行っている。従来美術部の1室であった資料室は、その機能の充実発展を期するため、昭和52年4月18日情報資料部となり、美術部は現在2室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術は第二研究室が担当する。

調査研究は、美術部所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果たして、広く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行い、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を収めた。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」（昭和7年創刊）に発表し、大部の成果は臨時単行の研究報告書として刊行している。またわが国美術界の全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編集発行している。

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基づいて創立された、美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は、黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開していたが、建築工事のため目下閉鎖している。

第一研究室

第一研究室の研究員は、日本及び東洋諸地域の古美術について、各々専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、また常に精密な基礎資料の収集に努めている。その研究課題と調査研究内容は(2)研究調査活動の項

に示す通りである。

昭和49年度より4カ年計画で始まった芸能部と共同の特別研究「浄土教関係文化財に関する総合研究」の中で、絵画・彫刻・書蹟・工芸の造型部門を情報資料部研究員と共に担当し、研究調査活動を行った。

文部省科学研究費による共同研究としては「科学的方法による古彫刻の構造、材質、技法の研究」(特定研究I・代表者 久野健)、「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」(一般研究A・代表者 上野アキ)、及び「中世絵画・彫刻作家資料の収集と研究」(一般研究A・代表者 宮 次男)の一部を担当実施した。

第二研究室

明治以降美術史の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査を行っている。前者については時代的に西洋美術の影響が強いことから、それとの比較研究を進めている。

現代美術の動向に関する調査は、集積した年度資料を整理し、その結果を「日本美術年鑑」として毎年公刊してきているが、本年度は昭和51年(1月～12月)の内容を盛った昭和52年版編集を進めた。

また本年は、黒田清輝巡回展(鹿児島)が実施され、本展開催にともなう研究事務(作品選定、カタログ制作他)については、第二研究室がこれに当り、進捗させた。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 日本彫刻史の研究

(1) 古代彫刻史の研究

滋賀県小谷寺及び百済寺の金銅仏の調査及び東京芸術大学所蔵金銅仏のX線透過撮影による調査を行った。(久野)

前年度に引き続き岡寺本尊像の調査を行った。また安居院飛鳥大仏のファイバースコープ等による調査を行い、東北地方の乾漆像、能満寺虚空蔵菩薩のX線撮影を実施した。(久野、猪川)

(2) 平安鎌倉時代彫刻史の研究

調査研究

京都浄瑠璃寺四天王像の7線撮影, 広島西提寺, 香川法蓮寺, 福井多田寺, 中山寺, 長野世尊院, 福島大倉寺等の諸像の調査を行った。(猪川)

(3) 尊像別分類による彫刻の研究

観音像について未調査像及び文献資料の収集: 釈迦像の一部についての作例の整理を行った。(猪川)

2. 日本古代中世絵画史の研究

(1) 仏涅槃図の研究

前年度に引き続いて新指定の常念寺本を調査。(柳沢, 関口)

(2) 浄土教絵画の研究

法華寺蔵阿弥陀三尊及び童子像の再調査(柳沢), また阿弥陀院旧蔵阿弥陀聖衆来迎図, 清涼寺蔵迎接曼荼羅図を調査。(柳沢, 関口)

(3) 真言八祖行状図の研究

前年度に引き続き, 八祖行状図のうち一行・恵果・空海図について詳細な調査を実施した。(柳沢)

(4) 密教絵画研究

東京霊雲寺蔵五秘密像, 不動明王像, 大威徳明王像を調査(柳沢, 関口), 千葉県福善寺蔵十二天像, 真言八祖像を調査。(関口)

(5) 科学的方法による古代絵画の材質・技法に関する研究

科学研究費特定研究「科学的方法による東洋古代中世絵画の材質・技法に関する研究」(代表者 東京大学教授 秋山光和)に参加, 山梨県大善寺蔵不動明王像などを調査。(柳沢, 関口)

3. 近世絵画史の研究

江戸洋風画の研究

前年度に引き続き, 長崎派の作品, 川原慶賀の国内所在作品の調査を続行。(陰里)

4. 日本近代美術史の研究

(1) 近代彫刻家の研究

前年来の主要木彫家に関する調査研究を続行した。また科学研究費総合研究「近代日本美術における1920年代の研究」(代表者 三木多聞)に参加, この時代の前衛彫刻家として活躍した陽成二ら旧構造社関係の作家について調査を深めた。(中村)

(2) 日本近代絵画史の研究

近代風俗画についての調査を進め、大阪における風俗画の主流である北野恒富、中村貞以とその周辺について、作品の实地調査、撮影を行った。(関)

明治初期の洋画家と洋画教育について調査を続け、フォンタネージ展開催(東京国立近代美術館)を機に、研究成果の一部を発表した。(陰里)

明治後半期以降における印象派的絵画の移植と展開について研究成果を発表し、引き続き黒田清輝の作品を中心に主題と図像について研究を続行している。(陰里)

5. 日本工芸史の研究

現在は陶磁・漆工・金工の研究員は不在で、染織専門の主任研究官田実栄子が必要に応じこれらの調査に当たっているが、主たる研究題目及び調査活動は下記の通りである。

(1) 近世初期染織品の研究

(2) 小袖の研究

(3) 伝統的染織技術の調査・研究

(4) 上代裂の研究

研究題目の中、特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては、和歌山市の紀州・東照宮伝来服飾類の調査、米沢市の上杉神社蔵の上杉謙信所用袴類及びビロード洋套の調査、宮城県白石市の片倉家伝来胴服・陣羽織類(うち小紋胴服は昭和53年3月重要文化財に指定された。)の調査研究が昭和52年度の主なものである。「小袖の研究」は京都国立博物館蔵品・名古屋の徳川美術館蔵品の調査研究を主とし、片倉家伝来黒緇子小袖の修復技術部との共同研究(修復技術上の)を続行する。「伝統的染織技術の調査研究」は「型染」「紋り染」「餅」「紬」「緞通」等の調査に、京都・名古屋・新潟・福岡・佐賀・長崎へ赴いた。「上代裂の研究」は東京国立博物館蔵品、京都国立博物館蔵品、昭和52年秋の正倉院展出陣染織品の調査を通じて進めた。(田実)

6. 和漢書道史の研究

(1) 日本書道の美術史学的研究

——日本書道の遺品の精査研究——

日本書道の一つの頂きである平安朝書道を代表する三蹟の遺品について、これ迄疎

調査研究

漏も少なくなかった基礎的研究として各遺品の釈文・釈義よりはじめる再検討を開始し、まず去夏^{ゆさ}等を調査研究した。(田村)

(2) 基準古筆切の蒐録研究

書道史は勿論、国史・国文の研究にも有益な資料である古筆切について——書写年代を明記する奥書の部分の切れ、題名等を存する部分の切れ——これらを蒐録して古筆切研究の基礎をきずこうとする。(田村)

(3) 日本書道の文字学的研究

——特に異体字の研究——

漢字には異体字がいろいろと多く、これを利用して書道史を研究すれば得るところが少なくない。その新分野を開拓して親鸞の筆蹟の解明をこころみている。(田村)

7. 中国絵画史の研究

台北故宮博物院において、元画71点及び「晚明変形主義画家作品展」「歴代画馬特展」の陳列品を調査し、また中央図書館所蔵の文俶筆「金石昆虫草木状」を調査撮影した。(川上)

8. 現代美術の動向についての研究

国・公立美術館をはじめとして各私立美術館、画廊等で開催された国内外の作家作品による近代・現代美術の展覧会を随時調査し、作品写真、目録などの資料蒐集を行った。各部門の担当は下記の通りである。

彫刻・立体造型 (中村)

日本画 (関)

洋画・版画 (陰里)

B 特別研究

「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」

(研究代表者 美術部第一研究室長 久野 健)

分担課題

七、八世紀の阿弥陀如来像とその背景 (久野健)

浄土教関係諸尊像の様式変遷の研究 (猪川和子)

阿弥陀往還来迎図の研究 (柳沢孝・関口正之)

フリア美術館蔵の六道絵（江上綏）

出相阿弥陀経について（宮次男）

親鸞聖人筆蹟の研究（田村悦子）

唐宋浄土教美術資料集成（川上涇・鶴田武良）

朝鮮における浄土教絵画（上野アキ）

日本の文化史上、仏教の占める位置は極めて重要であるが、特に、平安時代中期以降浄土信仰は、宗派にかかわることなく広く普及し、国民生活と密着して展開してきた。そのため浄土教が文化に及ぼした影響は多大である。よって、浄土教とそれに関する有形、無形の文化財との相互関係及び絵画・彫刻・工芸・芸能等各分野間の相関関係を美術・芸能部門が総合的に調査研究することを目的とする。

本年度は彫刻部門では四十八体仏中の山田殿像をはじめ、白鳳、天平年代の阿弥陀如来像及び弥勒仏の調査を行った。またこれと平行して古代の阿弥陀信仰の変遷を探索した。絵画部門では、阿弥陀往還来迎図の研究をさらに推進した。書蹟部門では、親鸞の筆蹟の特異性に対して、仏教書道史学的新研究を試みた。

C 科学研究費

「科学的方法による古彫刻の構造、材質、技法の研究」

（特定研究(1) 研究代表者 久野 健）

本年度は、従来内部構造の不明であった京都蟹満寺本尊釈迦如来像、奈良飛鳥寺本尊釈迦如来像の胎内をファイバースコープにより撮影（久野、猪川）、福島能満寺の木心乾漆虚空蔵菩薩像のX線撮影（久野、猪川）、京都浄瑠璃寺四天王像のγ線撮影（久野、猪川）、東京芸術大学所蔵の金銅仏のγ線撮影（久野）等を行った。これらの調査結果は、昭和53年2月28日、国立教育会館で行った特定研究「古文化財」の総会で発表した。

2 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的研究を行うことを

調査研究

目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室内の三室より構成されている。

芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、記録の作成としての撮影・録音などの作業を行う。また研究の結果は刊行・研究発表会・公開学術講座の開催などによって公表する。

本年度は、共同研究会としては「狂言の技法の研究」「陰囃子の構造の研究」「民俗芸能の民俗的基盤の研究」等の課題について、研究員が2、3名ずつ組をつくって調査研究を行い、また部内研究員全員が美術部研究員と共同による特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」(49年～52年度4カ年計画最終年度)に参加して、浄土教関係の寺院行事並びに芸能の調査と資料の収集を行った。

また、各研究員は個々に研究課題を選んで実証的な調査活動を行いつつあるが、いずれもそれは文化財行政に直接寄与する基礎的な調査研究であると同時に、従来立ち遅れ気味のわが国の芸能研究を推進せしめ、日本芸能学の樹立に貢献する力ともなる研究である。演劇研究室を中心とした寺院行事の研究や、音楽舞踊研究室におけるメログラフを用いての長唄や祭囃子の分析的研究や、民俗芸能研究室における芸能の伝承方法の研究などは従来の学界には求められなかった先駆的研究である。

刊行物としては、『芸能の科学』9「芸能論考IV」(執筆者 佐藤・羽田・横道・柿木・山本)と、芸能部所蔵の安原コレクション邦楽レコードを整理した『音盤目録』Ⅲ「音楽」を53年3月に刊行した。

恒例の公開学術講座は、「狂言の技法」をテーマとして52年12月に矢来能楽堂で開催、研究者を対象とした連続研究発表会は「比較音楽学」のテーマで52年7月に行った。また、視聴室舞台が改装整備されたのを機会に、実技分析を中心にした「話芸研究会」「民謡研究会」「大神楽研究会」などを実技者をまじえて実施した。また前年度に引き続き「能楽技法研修会」「狂言伝書輪講会」「レイバン舞踊譜 Labanotation の研究」等の研究会を定期的に行った。

演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的・演劇学的に調査・研究を行い、ま

たこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても、調査研究を進めている。

本年度は、個人研究として「寺院芸能の研究」「能の演出史の研究」を行い、共同研究として「狂言の技法の研究」、他の研究室との協力により「陰雛子の構造の研究」「浄土教の文化財に関する総合的研究」を行った。

音楽舞踊研究室

日本の音楽および舞踊について、芸術学的、音楽学的調査・研究を行い、また、これら伝統芸能の成立に深い関係を持つ周辺諸分野についても調査・研究を進めている。

本年度の個人研究は「長唄《小鍛冶》に見る流派性——今藤派と研精会派の比較分析」「奄美音楽の研究——朝花と三味線について」が行われ、また共同研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」に、研究員が参加して調査・研究を行った。

また国内調査としては、北九州地方および日向地方の民謡の録音・調査を行い、海外調査としては、イギリス、フランス、イタリアにおいて伝統音楽研究の現状および各国の音楽政策についての調査・研究を行った。

外部研究者とのワーク・ショップとしては「レイバン舞踊譜 Labanotation の研究」が昨年に引き続いて行われた。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承する民俗芸能を対象とし、それらの芸能の保存・活用に資するために必要な研究を行っている。本年度は一般研究として「民俗芸能の民俗的基盤の研究」「民俗芸能伝承方法の研究」「民謡の研究」「話芸・寄席芸の研究」「古典芸能便覧作成の研究」「風流系太鼓踊の研究」「大神楽の技法及び演出の研究」を行い、特別研究として「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」に研究員が参加して他の研究員と共に共同研究を行った。文部省科学研究費による研究としては「日本民謡歌詞の総合的研究」(総合研究(A) 研究代表者 三隅治雄)を実施した。

また、例年行われる全国及び地方別の民俗芸能大会に出場した芸能の撮影・録音を行った。

調 査 研 究

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 民謡の研究

日本の民謡の研究において、民謡の芸術的要素を無視してはその全き姿をとらえることができないという観点より、上代から近世に至る日本の歌謡伝承の上に占める芸術の位置を究明する目的をもって、前年度に引き続き近世歌謡の分析を行い、あわせて童唄の中の遊戯唄の芸術的要素についての調査研究を行った。また毎月一回定期的に外部研究者及び演奏家を招いて研究会を催し、各種の討論討議を行っている。(仲井・三隅・中村)

2. 民俗芸能の民俗的基盤の研究

芸能を、その行われる季節・場所・参加者(演者・観客を含む)などの面から取りあげる連続した研究の一環として、前年度は「道中の芸能」に関する調査を行ったが、本年度も引き続き「道中の芸能」に関する調査研究並びに「道中の芸能」を生む基盤となった、とこよ神信仰とそのとこよ神送迎の祭儀に関する調査研究を行った。(三隅・仲井)

3. 話芸・寄席芸の研究

落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究を安原コレクション邦楽レコードの整理を通じ続行中である。また本年度は講談の台本・口演技法に関する研究会を、田辺南洲主宰の講談研究会と共同で毎月一回開催した。(三隅・仲井・中村)

4. 民俗芸能伝承方法の研究

各種民俗芸能の伝承方法について資料の収集・分析を行った。(三隅・中村)

5. 古典芸能便覧作成方法の研究

古典芸能の基礎となるべき年表・演目・作者・文献等を網羅的に集めた便覧作成の仕事を進めた。(中村)

6. 風流系太鼓踊の研究

「じんやく踊」という名称に注目し、「じんやく踊」に関する資料の収集とその分析を行った。(中村)

7. 大神楽の技法及び演出の研究

芸能部視聴室における月一回の研究会を中心に技法及び演出方法の研究を行った。
(中村)

8. 狂言の技法の研究

(1) 狂言の演出の諸要素を研究する前提として、大蔵虎寛本・大蔵虎明本等による脚本構造(小段分析)の検討、江戸中期の型付書「間・狂言仕方附」の記載内容と現行演出の比較照合を行った。(羽田・松本)

(2) 狂言における囃子事の研究を進める基礎として、虎明本・虎寛本・天理本・三百番集本に見える囃子事の名称をカード化し、現行演出の囃子事との異同を調査した。(羽田)

9. 陰囃子の構造の研究

歌舞伎音楽の重要な要素である陰囃子の構造の研究。基本資料である付帳(実演の手順の記録)の中から通行演目120種に関するものを選び、その内容をカード化して分析を行いつつある。(横道・羽田)

10. 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行い、その変遷・分化をあとづけることを一貫した目的とするが、本年度は各宗派の重要法儀である「祖師会」に研究の主眼を置き、南都諸宗から浄土系各宗派に至る祖師会の史的変遷について考察を行った。また41年度以降継続的に実施している「東大寺修二会の研究調査」については、53年度刊行予定の研究調査録第三冊のための補足調査を行った。(佐藤)

11. 能の演出史の研究

能の研究は近代において急速な進歩を遂げており、その中心も文学的・歴史的な面から「能」という芸能の実態についての考察に移ってきている。舞台芸能としての性質上、そうした演技・演出面に関する資料はあまり多くはないが、面・装束・型・囃子などの構成要素に分けてその変遷を探り、能の演出の流れを考えてみようとするものである。

今年はまず、さまざまな伝書・文書類の中から、装束に関する用語を抽出し、カード化を行った。(松本)

調査研究

12. 伝統歌曲の音楽分析的研究

伝承・記録・保存のための基礎研究として伝統歌曲を音楽的に分析し、その音楽性を音楽学的に解明するもので、本年度は長唄「小鍛冶」の記録作製および分析が行われた。(柿本)

13. 奄美音楽の研究

昨年度行った現地調査によって収集された「朝花」の録音および調査データに基づいて、「朝花と三味線について」の基礎的研究をまとめた。(山本)

14. 「音盤目録Ⅲ」の編集

安原コレクション邦楽レコードのうち、音楽関係レコードの整理を完了し、レコード目録出版のための原稿を完成した。(柿本・松本・山本)

15. 目黒ばやしの調査・研究

江戸に残る古い祭囃子のうち、特に古制を色濃くとどめていると考えられる「目黒ばやし」について調査・録音を行い、音楽調査記録を作製した。(柿本・山本)

B 特別研究

浄土教関係の文化財に関する総合的研究

(研究代表者 美術部第一研究室長 久野 健)

分担課題

念仏狂言の研究(三隅)

練供養の研究(三隅)

念仏踊の研究(中村)

念仏讃の研究(柿本)

六時礼讃の研究(佐藤・羽田)

日本文化史上重要な位置を占める浄土教信仰は、わが国民生活に密着して展開してきた。この浄土教に関する有形・無形の文化財について、美術・芸能両部が文化史的視野で総合的に研究することを目的とする。

本年度はその最終年度にあたり、補足調査として、浄土宗の重要法儀である五重相ごじゅうそう伝会でんえ、千葉県各地の念仏芸ねんぶつ、福井県遠敷郡の六斎念仏ろくさいねんぶつの実地調査を行い、また天台宗てんたいしゅう声明例時作法しょうめいれいじさく、浄土宗六時礼讃声明ろくじらいざんしょうめいの特別録音を行った。

目下、各自前記の研究課題に従って研究成果をまとめつつある。

C 科学研究費

1. 日本民謡歌詞の総合的研究(総合研究(A) 研究代表者 三隅治雄)

日本全国に伝承される民謡の歌詞を可能な限り集め、日本民謡の歌詞集成を行い、かつ、それによってわが国における民謡の流転と変容の論理を究めようとする研究である。3ヶ年計画のうち本年度においては、全国各地における民謡歌詞の伝承状況・内容の確認のため、全国都道府県及び市町村の教育委員会や公民館・学校・青年団等へ調査用紙を送付し、書面による第一次採集を行った。また特に民謡を数多く伝承している地域に対しては現地調査を実施し、歌唱の録音や伝承基盤の調査などを行った。その調査地の主なものは次の通りである。千葉県・愛知県・新潟県・広島県・山口県・熊本県・宮崎県・沖縄県。以上の調査によって得た資料を逐次カード化し、爾後の研究の基礎資料とすべく整理を行っている。一方、民謡記載文献を各地から収集してマイクロリーダーカメラによって記録化した。(三隅・柿木・中村・仲井および他機関の西角井正大・大森亮尚・高木啓夫)

2. 能楽技法の総合的研究(一般研究(B) 研究代表者 横道萬里雄)

次の研究成果を得た。

- ① 能面の基本種約80種、変種・亜種約300種を、4門・8群・26類に分類。
- ② 扮装類型95種を、2門・4群・12区分に分類、各類型の命名。
- ③ 笛方一噌流の指付の分類。
- ④ 小鼓方幸流・大倉流の手組約200種、大鼓方葛野流・高安流の手組約160種について、各手組の機能を考え、分類。
- ⑤ 能の基本曲30曲について、囃子の手付を主にした「再構成資料」の作成に着手。
- ⑥ 囃子事64曲について、演出上の機能と楽式を検討し、新たな分類を行い、「囃子事各説」の作成に着手。
- ⑦ 本研究の対象となる現行曲248、参考番外曲17を、6門・35群に分類し、新名称を附与。
- ⑧ 上記の成果および今後の研究を達成するために、譜本・型付・手付・指付・頭付等の資料を収集。(横道・佐藤・羽田・松本・三隅・柿木)

3 保存科学部

(1) 概 要

文化財の材質・構造に関する科学的分析研究、並びに文化財のおかれている保存環境の自然科学的研究を行い、これらを基礎として文化財の保存に関する技術的研究を行っている。研究の成果は文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。また文化財の年代測定・産地推定の基礎的研究も手掛けている。

研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の3室からなっている。

調査研究の結果は、修復技術部との共同の機関誌「保存科学」により公表される。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）並びにその結果の公表を職務としている。

具体的には微量分析及び非破壊分析による無機及び有機物質の材質・技法・劣化に関する研究、展示・保存環境における汚染因子の究明とそれらの文化財への影響に関する研究及び材質劣化防止に関する研究を行っている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表を職務としている。文化財自体の構造・強度等の力学的試験を行い、X線、 γ 線のラジオグラフィーによる内部構造、欠陥、虫害、腐朽の解明を行っている。また赤外線テレビによる銘記、下絵等の判読等にリモートセンシングの手法を取り入れる試みを行っている。

また保存環境に関し、採光、照明、温湿度等の影響とその防止の研究を行う他、展示、収蔵、梱包輸送の際の適正条件の設定と調節技術を開発し、新施設を使用する際の必要な処置の研究を行っている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその公表を職務としている。

保存科学部

黴・細菌・昆虫等による文化財の被害調査並びに黴・細菌・昆虫等の採取・培養・同定及びそれらの殺菌・殺虫等の防除用薬剤の選定と方法の研究と実施の指導を行っている。

以上の各研究室の担当研究員の専門分野の基礎的研究のほか、複合的な判断、処置を必要とする研究対象に対しては部内、部外（他研究機関を含む）との共同研究が行われている。

特別研究「石造文化財の保存、修復に関する科学的研究」は修復技術部との共同研究で、3ヶ年継続の第1年次として、石材の材質及び劣化現象の調査、研究を開始した。

受託研究は、「史跡虎塚古墳彩色壁画保存のための調査研究」及び修復技術部と共同の、「国宝、重文日光社寺建造物に関する研究」が行われた。

科学研究費による研究は、特定研究「自然科学の手法による遺跡・古文化財の研究」において、計画研究・3カ年継続の第2年次として保存科学部門に当部研究者を代表者とする2課題、及び材質、技法、産地部門の課題にそれぞれ分担参加している。

また、一般研究(A)、(D)各1件を実施した。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 文化財の材質に関する研究

(1) 非破壊分析、微量分析

(イ) 青銅器の成分元素組成研究の一環として、古銭試料約50種類を放射化分析とプラズマ発光分光分析で各試料につき約15元素を定量し、国別・時代別による差異を考察した。

(ロ) 和紙23点、ヨーロッパ産の洋紙8点、和紙の原料であるコウゾ、ミツマタ、ガンビなどに含まれる微量の22元素の定量を放射化分析で行った。これは昨年度まで行われた特別研究の延長、補足の研究である。

(ハ) 日本及びヨーロッパの土器、瓦等約30点を放射化分析して主成分元素、微量元

調査研究

素を定量した。昨年度のデータと併せて、パターン分類の種々な方法を比較検討した。(馬淵)

(2) 年代、産地の標準的試料等の材質に関する分析データの蓄積

模造(文化庁美術工芸課保存事業)のための材質調査として法隆寺献納御物、海磯鏡の蛍光X線分析を行い、合金配合の参考に供した。(江本・馬淵)

三角縁神獣鏡等8面、金銅仏3体、福岡県出土ガラス玉類、彩色顔料等につき、X線分析により材質を分析、技法との関連につき研究を行った。(江本)

(3) 建造物彩色復元のための顔料材質調査

重文・兵庫：酒見寺多宝塔内部彩色

国宝・京都：本願寺唐門彩色

僅かに残存する彩色顔料を採取し、蛍光X線分析及びX線回析分析により、当初の顔料を測定し、復元彩色の資料とした。(江本)

2. 文化財の保存及び展示環境等に関する研究

(1) 施設内保存環境の調査

展示室・収蔵庫内の温湿度、照明等の環境の測定、新設展示施設のシーズニングの検討を行い、展示・保存環境の適否に関し調査を実施している。(石川)

1) 東京：増上寺収蔵庫

2) 大分：大分県立芸術会館

3) 愛知：名古屋市博物館

4) 福井：福井県立美術館

5) 埼玉：埼玉県立歴史博物館

6) 群馬：群馬県立博物館

(2) 外国美術品の国内展示における会場内の保存環境調査及び指導

古代エジプト展(53.4.1～53.5.28)の準備のための温湿度測定。(石川・三浦)

(3) 展示施設に用いる光源の選択

展示に用いる照明光源として、蛍光灯が主体となっているが、その分光エネルギーを測定・検討し、各種展示物に適する蛍光灯の選定を行った。同時に紫外線除去効果の測定を行った。(石川)

(4) 粉じんに関する研究

アンダーセンサンプラー・X線マイクロアナライザーにより、浮遊粉じん粒子の大きさと組成について検討した。文化財は特殊環境におかれているため、微粒粉じんの採取と分析法が困難と思われたが、アンダーセンサンプラーで採取した微量粉じんをX線マイクロアナライザーで分析する方法は有効であった。

現場での調査として三十三間堂（京都）堂内の粉じんを測定した結果、 $1\sim 2\mu$ 以下の粉じんは、K, S, Cを主体とし、これより大きい粉じんは、Fe, Ca, Si, Cl等を多く検出した。又、Ag蒸着膜上に採取した $1\sim 2\mu$ の粉じんからカビの発生がみられた。（門倉）

3. 文化財の生物劣化とその防除に関する研究

(1) 実態調査

文化財に被害を及ぼす生物（微生物や昆虫など）の実態調査は、継続的に実施し、被害の状況に応じて防除対策を検討し、助言、指導を行っている。本年度は下記について行った。

- 1) 桂離宮の燻蒸指導 (52.6) (森)
- 2) 日光東照宮の生物劣化調査 (52.6) (新井・森)
- 3) 国立民族学博物館の燻蒸指導 (52.7) (森)
- 4) 北海道の蟻害調査、とくに分布北限について (52.9) (森)
- 5) 南部利康霊屋（重文）の燻蒸指導 (52.9) (森)
- 6) 大樹寺（岡崎）の虫害調査 (52.10) (森)
- 7) 明治神宮宝物殿の生物劣化調査 (52.11) (新井・森)
- 8) 沖縄県のシロアリ調査 (53.2) (森)
- 9) 法隆寺金堂焼損壁画の微生物防除（新井）
- 10) 珍敷塚古墳保存施設内の微生物防除（新井）

(2) 合成樹脂に微生物の発生する原因と対策

木彫修復に用いられた合成樹脂には、劣化部位に存在する生物の代謝生成物を養分として微生物の発生することが判明した。防除対策として、合成樹脂にサイアベンダゾールを加えると微生物の発生を予防できると結論した。（新井）

(3) 低毒性防腐・防虫剤の検討

薬剤の安全性の観点から、低毒性薬剤9種類について、防腐・防微生物・防虫効力を比

調査研究

較検討した。(新井)

4. 国宝高松塚古墳壁画修理事業への協力

壁画修復処置の点検が行われた後、石室内の環境調査(温度・湿度、空気組成、微生物)及び、炭酸ガス、溶剤の除去等の作業環境保全に協力した。(江本・門倉・新井)

5. 未開口石室内の環境に関する研究

未発掘古墳の石室内の温湿度、空気組成、微生物因子を調査研究し、それらの特性を明らかにすることは、発掘後の環境条件の設定等の保存方法の策定に不可欠である。

機会をとらえて現地調査及び関連の研究を進めている。

本年度は、下記の古墳で調査を行い、考古学的調査に協力した。

- 1) 福岡 八女市：丸山古墳(門倉・新井)
- 2) 茨城 勝田市：十五郎横穴 四基。(江本・見城・門倉・新井)
- 3) 神奈川 川崎市：馬網古墳(江本・見城・門倉・新井)
- 4) 奈良 明日香村：マルコ山古墳(江本・門倉・新井・三浦)

なお、馬網古墳に関しては保存活用の見地から開口後、石室内保存状況及び、壁面、彩色顔料の修復技術的調査を行った。古墳は石組みの補強工事が施され、埋戻された。(江本・新井・見城・樋口)

6. 考古遺物、遺跡等に関する考古化学的研究

発掘時の埋蔵環境での変質と保存環境での変壊を考慮して、遺物取り上げ時の考古化学的調査方法、発掘時等の環境保持方法、及び変壊生成物等を分析し、変質機構、環境の推定等を研究している。

- (1) 史跡 熊本：鍋田横穴群

外壁部を調査し、変質物を採取して分析を行い原因究明のための検討を行っている。

- (2) 史跡 熊本：大坊古墳

保存施設建造前の前室組石積直し時の玄室内環境保全のための調査を行った。

- (3) 奈良 明日香村：マルコ山古墳

発掘時の環境保持等及び閉鎖方法につき助言、協力を行った。漆喰、土壌等の試料

を得、材質研究を行う計画である。

(4) 史跡 福岡：竹原古墳、珍敷塚古墳

彩色石組み模造製作のための計測等の事前調査及び型取り時の環境保全の助言を行った。

(5) 北海道 江差：開陽丸引揚げ遺物

各種遺物の保存処理法の検討、材質調査を前年度に引き続き行った。

(6) 古墳、遺跡の土壌に関する研究

密閉された古墳内はバクテリアなどの微生物による有機物の分解により、アンモニア、アミン類、炭酸ガス、メタンなど生成するが、これらのガスの一部は土壌に吸着される。これらの吸着ガスの性状を明らかにするため、土壌の熱分析、pH 測定などを行っている。(見城)

7. 漆工品に関する科学的調査研究

(1) 国宝、春日大社、蒔絵筆調査

模造(文化庁美術工芸課保存事業)のための資料として、蒔絵粉の材質を非破壊的に蛍光線分析を行った。その結果、銅粉が使用されていることを見出し、製作技法の一部を明らかにした。(江本)

(2) 東洋の漆工展(東京国立博物館)展示品の調査

中国、宋、元時代の盆、椀等22点につきX線透視による構造調査を行った。(石川)
また、高台寺霊屋蒔絵屏については、X線透視、蛍光X線分析(非破壊的方法)により、構造及び蒔絵粉の材質調査を実施した。(石川・江本)

8. 漆に関する研究

(1) 黒漆塗膜の硬化、劣化過程について

透漆に鉄粉、砥汁、鉄漿、硫酸鉄を混合した黒漆塗膜の赤外吸収スペクトル、粘弾性の測定、熱分析を行い、黒漆塗膜の2,3の物性を明らかにした。(見城)

(2) 古代漆の分析法について

古墳や遺跡からの出土される漆膜には、地の粉、土壌などが付着しているので、これらを除去しないと、赤外吸収スペクトルによる漆か否かの同定することは、極めて困難である。これらの無機物は、いずれも比重が2以上であるが、漆塗膜の比重は1.3以下である。そこで比重1.6319の四塩化炭素を用いて、漆と無機物の分離を可能

調査研究

にした。(見城)

(3) 縄文遺跡から出土した漆様物質に関する研究

青森県は川遺跡から出土した漆様物質について、核磁気共鳴分析、分子量測定、元素分析及び赤外吸収スペクトルを利用して、構造化学的研究を行い、この物質が石油重質成分に属するいわゆるアスファルトであることを認めた。(見城)

9. リモートセンシングの文化財への応用

不明瞭な画像や、色々な情報の重なった画像から、希望する特定の画像だけを補正して取り出す画像処理の技術が文化財への応用として考えられる。

本年度は、インバースフィルタを用いて、表面の含水率分布から対象内部の構造を知る方法について実験を行い、一次元の場合は成功したが、二次元の場合は検出器の精度等の問題が残されている。(東京大学大型計算機センターを使用)

その他、新しい画像処理技術として、X線コンピュータ断層撮影(XCT)の実験を、千葉大学医学部附属病院の協力の下に行った。XCTは今後、対象によっては有効な研究手段になると考えられた。(三浦)

B 特別研究

石造文化財の保存、修復に関する科学的研究

(3ヶ年継続、第1年度)〔修復技術部と共同研究〕

石造文化財は古墳、寺院趾、建造物、磨崖仏その他多岐に亘り、現状損傷著しく、保存対策の急がれているものも多いが、これらに関する基礎的な劣化機構の解明も、またその修復技術の研究も甚だ不十分である。本研究はこれらを総合的、組織的に推進し、恒久的な保存方法、修復技術の確立を計ろうとするものである。

本年度の研究内容は下記の通りである。

(1) 本邦石造文化財の用材の代表的なものを収集し、鉱物組成、岩石学的特徴、化学組成及び諸物性を測定し、規準試料として整備した。(江本)

(2) 磨崖仏等本邦石造文化財にかなりの比重を占める凝灰岩について、風化現象、修復処理等総合的に研究を行った。

大分県下、臼杵、熊野等8件の磨崖仏周辺の同質の石材の健全材及び風化部分のサンプリングを行い、放射化分析による化学組成を明らかにし、材質の違い、劣化の度

合いを測定した。また、熱分析等を行っている。(馬淵・見城)

(3) 風化脆弱化した石材の強化法の研究に関し、各種強化剤の耐久性の比較、点滴注入法の検討などを試みた。(樋口・西浦・青木)

(4) 日照、夜間放射の影響を知るため、石材表面及び内部への温度勾配を測定中。
(三浦・石川)

(5) 生物劣化については、劣化部分の微生物分析を行っている。(新井)

(6) 内外の石造文化財の保存と修復に関する文献収集。(西川)

C 受託研究

1. 史跡虎塚古墳彩色壁画保存のための調査研究

前年度に引き続き、埋戻し後の石室内環境因子の消長を調査した。

石室内の環境は、年間を通じて、温度13～16℃、湿度95～99%であった。空気組成は、炭酸ガス2.3～4%、窒素75～76%、酸素16～18%で前年度の測定結果と大差なく、生物因子に関しても総菌数に大きな変動が認められず、石室内の保存環境は定常状態を保っていると考えられる。

これらの結果は、勝田市市史編さん委員会により、他の事項とまとめられ、「勝田市史虎塚古墳」として53年3月に出版された。(門倉・見城・新井・江本)

2. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究(修復技術部と共同研究)

日光二社一寺所管の指定建造物の外装として用いられている漆塗装、彩色について、山内の多湿寒冷という特殊環境下での劣化、変色等の原因究明と保存対策をたてるのを目的としている。

(1) 建築彩色に発生する黴の防除

1) 51年度の結果に基づいて、五重塔彩色修復部分にサイアベンダゾールの0.5%エタノール溶液を50ml/m²吹き付け、中間試験を行った。

2) 彩色のバインダーである膠に防黴剤を混合して、彩色テストピースを作成し、五重塔第三層の西側に設置した。

(2) 生物劣化の実態調査を行った。

(3) 漆塗装の劣化及び彩色の変褪色

1) 重要文化財大猷院二天門の漆塗装の剝離片の各層を分析し、塗装工程を明らか

調査研究

にした。

2) 51年度東照宮本殿透塀の長押上下に設置した手板の試料を1年後に観察、判定し、試料の変色、霉の発生を認めた。

3) 東照宮(西廻廊、西南隅)、輪王寺(二天門)に毛髪湿度計を設置し、測定を継続した。(江本・見城・新井・三浦・中里)

D 科学研究費

1. 新設展示施設及び収蔵庫内の汚染現象と収納文化財への影響とその防除法(特定研究(1) 研究代表者 江本義理)

新営施設内の環境が安定してきているか否か、文化財の展示・収蔵に適しているか否かの判定に用いるモニター用のテストピースの選定、測定法に重点をおいた。

実験用小収蔵庫内での実験を中心に、コンクリートのいわゆる「枯らし」に関する基礎的研究を行った。

1) 温度・湿度はコンクリート壁の吸放湿や汚染因子の発生量と密接な関係があることが裏付けられた。また日照の影響と断熱材の効果を測定した。

2) コンクリートからのアルカリ性因子の判定法として、pH 混合指示薬の試験紙を考案し、従来のアマニ油含渡紙、金属板(鉄・銅銀)、密陀僧、漆等のテストピースに加え、実験庫、既設収蔵施設において試験を行った。この試験紙による判定は、反応が速く、低温期にも適格な判定ができる点が優れており、従来の通気法との対応を検討して、標準的方法を作成する計画である。

粉塵及び生物因子についても、施設内の調査を行って新しい知見を得た。

2. 文化財の虫霉害防除法の開発(特定研究(1) 研究代表者 森 八郎)

実態調査は、昆虫について、シロアリ、キクイムシ、シミ、チャタテムシ、カツオブシムシなどによる被害を実地に調査し、微生物では木材腐朽菌や細菌による被害を認めた。

燻蒸剤については、主として殺菌効力について常圧条件で検討した。また、減圧燻蒸時の殺菌条件も明示した。

酸化エチレンと弗化サルフリルの混合剤の殺菌効力を検討し、同時に爆発限界も調べた。

防微剤の材質への影響を金属・顔料・染料について調べた。

低毒性薬剤の殺虫殺菌効力を比較検討した。

和紙の種類によるゴキブリの嗜好試験を実施した。

3. 同位体分析による古文化財の研究（一般研究(A) 研究代表者 馬淵久夫）

分担課題 試料蒐集（江本）、化学分析（見城・門倉）

昨年度設置された質量分析計が本格的に動き始め、鉛及びストロンチウムの NBS 国際標準試料により機器の精度、確度、感度の検討を行った。その結果、十分に信頼し得るデータが得られることがわかったので、日本の方鉛鉛 3 種、中国と日本の古銅鉛 9 種につき鉛同位体比を測定した。日本と中国の鉛では同位体比が異なることがほぼ確認された。

ストロンチウムについては、土器、瓦について化学分離を検討中である。

なお、科学研究費は本年度で終了するが、この研究は今後も一般研究として継続する予定である。

4. 土壌の物理的性質の横穴古墳内温湿度に及ぼす影響に関する研究（一般研究(D)

研究代表者 三浦定俊）

横穴古墳周囲の土壌の物理的性質と、古墳内温湿度との関係について、特にその温度分布に関して調査、研究を行った。

調査の対象としたのは、福岡県八女市にある乗場古墳（前方後円墳、6 世紀、国指定史跡）であり、石室内の温度分布を連続測定した。外気温の日変化は 4～5 時間の遅れで、保存施設内に伝わっているが、石室内まではおよんでいない。石室内では、奥から手前に向かって、上下方向とに温度勾配があった。特に上下方向には 2℃ 近い温度差があり、当初、高松塚などの経験を基に考えていた値よりずっと大きかった。土壌の温度伝導率を測定して、土壌を通じての熱流より、石室入口扉を通じての熱流が原因していると考えられた。この他、土壌の透水率も測定したが、地山の土、盛土、覆土の間はかなり違いがあり、それが石室内の環境に大きく関係していると考えられた。

以上のほか、他の研究機関の研究代表者による計画研究に参加した者の研究課題及び分担課題、分担者は次の如きものがある。

「金属製遺物の非破壊的方法による材質分析の原理的検討」研究代表者 京都大学

調 査 研 究

文学部教授 樋口隆康

分担課題 金属のX線分析（江本）

金属の放射化分析（馬淵）

「遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究」研究代表者 奈良国立文化財研究所 佐原 真

分担課題 埋蔵環境と劣化現象（江本）

「科学的方法による古彫刻の構造・材質・技法の研究」研究代表者 東京国立文化財研究所 久野 健

分担課題 古彫刻の材質及び構造に関する研究（石川）

4 修復技術部

(1) 概 要

修復技術部は、文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究とその公表を主務とする部で、保存科学部が、主に文化財の保全にかかわる科学的分析研究をつかさどる部であるのに対し、修復技術部は、老化破損し、あるいは後世の付加物のある文化財について、もとの正しい状態に修理し、あるいは復元する方法についての科学的、技術的研究を担当している。

研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料などは勿論、木造建造物の組物や細部に描かれた絵、石造構築物などに及ぶ極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては、2研究室7研究員からなっている。

第一修復技術研究室

木材及び漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究とその結果の公表を主務とするが、現在は石・金属その他無機材質のものも研究対象とされている。

なお、第三研究室は昭和53年度から開設される予定であり、無機材質の文化財の研究はそこで行われる。

第二修復技術研究室

紙、繊維又は皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表とを主務とする。

両研究室とも、経常的な研究として、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究や、それらを修復するための伝統技術の整理体系化と科学的裏付けの資料集積、そして更に科学的な材料、技法の修復への応用と開発のための臨床的な研究などを実施しており、とくに材質強化、補強、接合、剥落防止、朽損部充填等について各種合成樹脂の応用と技法の開発に努めている。

これらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては両研究室員による共同作業によって研究が進められている。これらの詳細は次項に記す通りである。

特別研究「石造文化財の保存・修復に関する科学的研究」は、3カ年の継続研究の初年度として、文献収集、調査、実験研究を行った。(36頁参照)

また受託研究のうち、修復技術部の関係では

- (1) 重文日光男体山頂出土鉄製品の修復処置研究
 - (2) 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究(保存科学部と共同研究)
 - (3) 仙台市伊達政宗墓所出土副葬品の保存処置に関する研究
 - (4) 埼玉県指定史跡源義賢墓の修復処置の研究
- を実施し成果を挙げた。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 伝統的製作技法及び修復技術の研究

修復技術部の経常的な研究主題の一つとして、伝統技法の調査研究がある。現在は彫刻(木彫像の木寄せ法、彩色技法、金銅仏鑄造技法)、工芸品(漆芸・木工芸技法)、絵画・書跡の装幀技法、出土金属工芸品の技法などを研究対象としている。これは作品がどのような材料を用い、どのように造られているかについての実査を交えた資料蒐集分析、過去の修理記録及び実査データに基づく、修復技術の細部の分析を行い、これ

調査研究

に科学技術がどの様に応用され得るかを明らかにしようとするものである。

(1) 彫刻の製作技法、修復に関する実査研究

本年度は、従来から実査した資料の整理、図化分析を継続して行うと同時に、京都美術院国宝修理所の修理現場での技法実査、資料蒐集を実施した。(西川)

(2) 漆芸技法の研究

文化庁美術工芸課の保存事業の一つとして蒔絵箒(国宝・春日大社蔵)の模造が進められており、この問題に関する検討会が開かれたが、製作技法、模造方法等について助言した。(西川・樋口・中里)また、高台寺蒔絵屏(重文)について、「東洋の漆工芸」に出品するための修復技術的な調査を行った。(中里)

出土漆芸品については、高松塚古墳出土漆棺の保存処置に関する検討会において、科学的処置法について助言した他、宮城県山王遺跡出土の漆器類約30点を東北大学、東北学院大学及び一迫町において調査した。(中里)

(3) 出土金属工芸品の製作技法の研究

本年度は、高知県小村神社神宝環頭の大刀及び刀剣博物館所蔵の環頭大刀の実査を行い、製作技法資料を蒐集した。(青木)

(4) 装潢技法の研究

伝統技術の一つとしての装潢技法に関する資料蒐集と調査研究は、本年度も続行している。また、重要文化財指定会議の出品物につき、文化庁に協力して、一部糊さし、繕いなどの修復処置を行った。(増田)

2. 合成樹脂による彩色剥落止め技法の研究と実施

本年度は、東京音羽の重文・護国寺本堂天井彩色(板天井に下張りを施し、紙に描かれた絵を貼りつける。)の修理に伴う剥落止め処置を指導した。緑青部分や極めて薄い層状剥離部分には、アクリル樹脂パラロイドB72の5%トリクレン溶液を、厚い彩色層剥離部分には揺変エマルジョン(AC34)を注入する方法を用い、成果を挙げた。(樋口・増田)

通信総合博物館蔵の平賀源内「エレキテル」の彩色は、以前当所で剥落止めがされたが、厚塗りの胡粉層が再び剥離した。水溶性アクリル樹脂の浸透と揺変エマルジョン(AC34)の注入により良好な結果が得られた。また、世界救世教所有の荻生徂徠額には、樺材に「護國」の二字が浅彫されており、その部分には胡粉が厚く充填されて

いるが、木部収縮により一部浮上っており、欠損部分もある。この剥落止め処置を、水溶性アクリル樹脂及び揺変エマルジョンによって行った。欠損部分には胡粉を塗り、古色付けを行った。揺変エマルジョンは注射器で注入できるため、厚塗りの剥離に極めて有効であることが実証された。(樋口・中里)

現在、静岡県大須賀町三熊野神社及び王子神社の絵馬の剥落止めを実施中である。(樋口・茂木)

3. 木造文化財の合成樹脂による修復技術の研究

人工木材の諸物性についての基礎研究は、前年度に引き続き、科学研究費(特定研究)で行われたが、その研究成果の一部であるアラルダイト XN 1023 (ガラスマイクロバルーン混入エポキシ樹脂)による樹脂処置指導を、桂離宮の解体部材の修復に対して行った。また、この解体材の腐朽部の強化には、耐候性を重視して、メチルメタアクリレート半重合体を用いた。(樋口・西浦)

通信総合博物館所蔵の日本最古の電信柱(黒松の自然木)が虫害、腐朽のため著しく脆弱になっていたが、それにメチルメタアクリレート半重合体の含浸強化を行い、また一部、人工木材による修復処置を行った。(茂木)

4. 石造文化財の修復処置に関する研究

香川県指定文化財「石の塔」の修復を指導協力したが、その内容は、エポキシ樹脂による割損部の接着(ステンレス補強)、エポキシ樹脂凝岩による欠損部の整形、低粘度エポキシ樹脂の亀裂への注入、アルコキシメチルシラン(SS-101)塗付による強化撥水処理である。(樋口・青木・西浦)

重要文化財「オルト邸」(長崎県)石造部分の修理に際し、石柱の表層剥離部分への低粘度エポキシ樹脂の注入を実地指導したが、未だ多分に改良の余地が残されており、今後の検討課題となった。(樋口)

重要文化財「熊野磨崖仏」(大分県)修理の樹脂処置を美術院国宝修理所に協力して指導した。医学用点滴装置による SS-101 の滴下含浸を試みると共に、メチルメタアクリレート半重合体による表層剥離の処置も行った。(樋口・青木)

5. 鉄製品の修復処理の研究

東京国立博物館保管出土鉄製品の中から、新しい補強技術の定着をはかるべく東京都亀塚古墳出土金属製品一括、静岡県出土環頭大刀1口、出土地不詳環頭大刀1口の

調査研究

修復処置を行った。

また、従来余り積極的に行っていなかった脱塩処理を検討するために千葉市谷津遺跡・萩生田遺跡出土鉄製品の処置を実施した。(樋口・青木)

鉄製品に対するタンニン酸による防錆処置の研究を開始し、栃木県宇都宮市、重要文化財清厳寺鉄板碑の一部分をデンソー（タンニンとグリースの混合物）で処置し、その防錆効果を観察中である。このデンソー処置は、宮崎県立博物館の鉄製民俗資料の一部に適用され、好結果を得ている。(樋口)

6. 青銅製品の修復処置に関する研究

欧米で広く行われている青銅製品の保存処置法のいくつかを追試して来たが、本年度は埼玉県歴史資料館保管東松山市諏訪山一号埴出土銅製腕輪、栃木県小川町保管駒形大塚出土土文帯四獣鏡に対して、ベンゾトリアゾール法による保存修復処置を行い好結果を得ている。(樋口・青木)

7. 遺跡、遺構の保存に関する研究

ばん築等の地層断面を薄く剥ぎ取って保存する方法を検討するため、若干の基礎実験を行った。軟質イソシアネート系のOHインデクターを試みたが、収縮が大きく適性がなかった。現在は醋酸ビニール・マレイン酸エチル共重合体について実験検討中である。(樋口)

8. 染織品等の保存処置に関する研究

脆弱化した染織品のシリコンラバー加工の有機ガラスによるサンドイッチ式保存法は、本年度、国土館大学によって将来されたイラク、カルバラ遺跡出土染織品の保存・展示用ケースに採用され、それらのうち14点はサンドイッチ施工され、イラク政府に返却された。

また、東京国立博物館東洋館保管の敦煌出土染織品の保存についても、同方法が採用されたが、その中の祭壇用掛布のケースは92cm×260cmの大型となり、小型の場合よりも中間柱やステンレス棒などの工夫がなされた。同品は完成後ただちに陳列公開されている。(樋口・青木・増田)

9. 特別史蹟・国宝高松塚古墳壁画修理事業への協力

壁画修復処置のその後の状態の点検が行われたが、その際、立合い協力した。(増田)

B 特別研究

石造文化財の保存・修復に関する科学研究（保存科学部と共同研究、36頁参照）

C 受託研究

1. 重要文化財日光男体山頂出土鉄製品の修復処置の研究（栃木）

本件は、国庫補助による修理事業（3カ年計画）の一部であり、文化庁の要請に基づき、当部がその修復を行っているものである。錆のために脆弱化した鉄製品にアクリル樹脂エマルジョンの減圧含浸を行い強化をはかるとともに、考古学的見地からの欠失部の修復を主として行うもので、本年度は第2年度で約150点の鉄製品を対象にしている。（青木）

2. 国宝・重文日光社寺建造物の保存に関する研究（栃木）（保存科学部と共同研究、37頁参照）

3. 仙台市伊達政宗墓所出土副葬品の保存処置に関する研究＜Ⅱ＞（宮城）

本年度は出土品の内、特に状態変化の大きいキセル箱について保存修復を行った。キセル箱は木部が汚損し、漆膜のみ残存しており、発掘当時すでに破損が大きかったため、シーズニング中反りがひどくなり、漆膜自体の破壊の危険が出て来た。このため漆膜の移植を行う事とし、漆膜から木部寸法を実測し、木部を復元新造した。漆膜は割れ易くなっているので、和紙で裏打ちし、接着剤としては掃変エマルジョン、麦漆等を試みている。接着に際しては、押えが必要であるので、塩ビ板と画鋏による方法をとっている。この施工は来年度まで続けることとし、本年度はその予備実験的施工としていろいろな方法によって可能性を探っている。（中里・樋口）

4. 埼玉県指定史跡源義賢墓の修復処置の研究（埼玉）

埼玉県嵐山町に所在する凝灰岩製の五輪塔で、全体に破損が甚しく、石材表面のチョーキング現象、亀裂や折損が見られる。処置は、石造表面にフランネルを巻き、アルコキシ・アルキル・シラン（SS-101）を点滴等により時間をかけて含浸させた。強化後、割損部は、ステンレス棒の柄を入れ、エポキシ樹脂で接合した。欠失部は、エポキシ樹脂エマルジョンに同種の石材を砕いたものを混和した樹脂凝岩にて補修整形した。（樋口・青木）

調査研究

D 科学研究費

1. 古美術・古建築の主要材料である木材及びその化粧材料接着剤の劣化と修復処置後の耐久性・強度に関する研究（特定研究(I) 研究代表者 西川杏太郎）

この研究の目的は、古美術品、古建築等に用いられる木材とその表面に塗られる漆膜、彩色層の劣化変質現象及び木材の接着充填に用いる漆・膠等の伝統的材料や各種合成樹脂等化学的材料の強度、耐久・耐候性、経年変化の実態を科学的に明らかにし、一方、建造物の部材とその結合部の構造的強度、耐久性、経年変化の実態を検討し、併せて木造文化財の保存と修復技術の改良に役立たせるものである。

本年度は一昨年度に引き続き、丹・白土・胡粉・漆の塗手板を製作し、ウェザーメーター、屋外曝露による耐久性試験を行った。また、人工木材（SV 426, XN 1023）の諸物性試験を行い、XN 1023 の優秀性を確認した。

古建造物の継手四種については、一昨年度に引き続き、各種試験を行い、その結果について、現在解析中である。

これらの結果の一部は、昭和53年2月27日～3月1日、国立教育会館で行われた研究成果に関するシンポジウムにおいて次の如く発表した。

- ・古建築修復用人工木材の特性＜特にアラルダイト XN 1023 について＞（西浦）
- ・古建築構造材の力学的研究＜中間報告＞（伊原・文化庁建造物課）

2. 経巻・絵巻・冊子等の料紙に対する打塋技法の再現研究（一般研究(D) 研究代表者 増田勝彦）

本研究は、経巻・絵巻・冊子等の料紙に対して行われる加工技術のうち、現在途絶えてしまっている「打」「塋^{うい}」技法を再現することによって、この技法が与える筆法、描法への効果を検討するものである。

「打」「塋」技法に関する文献カードは500枚、80件を作成し、今後も続行する。

「打」技法の基礎となる箔打紙の製造工程についての調査も既に行い、その方法によって各種料紙の打加工を実施し、日本画家と協力して表現効果について検討を行った。

以上のほか、他の研究機関の研究代表者による研究に参加したものの研究課題及び分担者に次の如きものがある。

「遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究」研究代表者 奈良国

立文化財研究所 佐原 真

分担課題 保存処理実験及び保存材料の研究（樋口）

「平安時代後期の仏師とその作品に関する基礎的研究」研究代表者 東京芸術大学
美術部助教授 水野敬三郎

分担課題 文献資料（11世紀）の収集整理と作品調査（西川）

5 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室として美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管等に当たり、これらの資料を文化財関係事業のみならず、国の内外の研究者の利用にも供して美術史学研究における資料センターの役割を果たして来た実績に鑑み、更に充実発展させる目的のもとに研究所各部の所掌にかかる資料を対象とする情報資料部として、昭和52年4月18日新たに発足したものである。

研究組織は文献資料研究室及び写真資料研究室内の2室よりなる。

文献資料研究室・写真資料研究室

上記研究資料の作成、収集、整理、保管等を分担するが、特に本年度は、文献資料研究室は、昨年度から継続の科学研究費による「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」の推進力としての役割を果たした。

また、毎年、日本・東洋古美術に関する雑誌論文及び単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、美術史学界はじめ関連学界に著しく貢献している。なお、定期刊行物古美術関係文献については、さらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、前回の昭和11年～40年の分に引き続き、昭和41年～50年版の作成を準備中である。

これらの業務のほか、当部研究員は、日本・中国・中央アジアなどの古美術についての専門的調査研究を進めてその成果を公表し、浄土教に関する特別研究、科学研究費による一般研究「中世絵画・彫刻作家資料の収集と研究」（代表者宮次男）のほか、他機関の科学研究費による総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研

調 査 研 究

究」(研究代表者 東京大学 山根有三),「江戸時代障壁画の研究」(研究代表者 東北大学 辻惟雄),「朝鮮の9~16世紀の仏教美術についての総合研究」(研究代表者 実践女子大学 松原三郎)に参加した。

(2) 研究調査活動

A 一般研究

1. 日本古代中世絵画史の研究

(1) 料紙装飾を中心とする古代中世絵画の研究

米大陸西海岸地域的美術館等所在の遺品について調査し、カリフォルニア大学において共同研究を行った。(江上)

(2) 鎌倉時代絵巻物、肖像画の研究

絵巻物については、(1)概要に述べた科学研究費による一般研究との関連で東寺蔵弘法大師行狀絵巻など作者名のわかる作品に重点を置いたほか、合戦絵や隨身庭騎絵巻など似絵関係に重点を置き、また肖像画に関しては、文献、遺品の両面から調査研究を進めた。(宮・米倉)

(3) 法然上人絵伝(掛幅本)の研究

三重県西導寺蔵法然上人絵伝の調査を行った。(米倉)

(4) 経絵の研究

経典説話図の研究としては、台北故宮博物院において、わが国の作品に関係深い宋、元、明の版経挿絵と文字塔の調査を行った。(宮)

2. 日本絵画における古典的伝統の研究

科学研究費総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」(研究代表者 東京大学教授 山根有三)に参加、光悦色紙の宗達派装飾における古代中世料紙装飾の影響を中心に研究した。(江上)

3. 日本近世絵画資料の収集と研究

(1) 宗達光琳派の研究

科学研究費総合研究「日本近世絵画における古典的伝統の調査と研究」に参加、東京及び関西個人所蔵作品の調査を行った。(河野)

(2) 狩野派の研究

科学研究費一般研究「探幽縮図の研究」(研究代表者 河野元昭)により探幽縮図等の調査を行い、資料を収集整理した。(河野・江上・鶴田・米倉)

(3) 円山四条派の研究

関西個人所蔵作品、とくに四条派の景物画を調査した。(河野)

(4) 江戸時代障壁画の研究

科学研究費総合研究「江戸時代障壁画の研究」(研究代表者 東北大学教授 辻惟雄)に参加、高野山金剛峯寺諸塔頭の障屏画を調査した。(河野)

4. 東洋古代文様史の研究

米大陸西海岸地域的美術館等所在の遺品について調査した。また、韓国に出張し、韓国所在の古代遺物の文様を調査した。(江上)

5. 朝鮮仏画の研究

科学研究費総合研究「朝鮮9～16世紀の仏教美術についての総合研究」(研究代表者 実践女子大学教授 松原三郎)の絵画部門の研究調査を続行中。高麗経の荘厳画等、国内の作品の調査をはじめ、韓国における最古の浮石寺の壁画ほか、諸作品の調査を行った。(上野・江上)

6. 中国絵画史の研究

(1) 明清および民国期の画家資料の収集並びに作品の調査を継続した。(鶴田・川上)

(2) 大分、野内家所蔵明清書画の調査を行った。(鶴田・川上)

(3) 来舶清人並びに江戸時代舶載中国絵画について調査を行った。(鶴田)

(4) 中華人民共和国、上海市及び広州市において現代絵画の調査を行った。(鶴田)

7. 中央アジア古代絵画史研究

(1) 前年度に得た外国の資料に基いて研究を続行中。本邦所在のル・コック収集壁画の調査を行い、これらを比較検討して、キジル壁画の展開についての考察を進めた。(上野)

(2) 解放後の中国の諸文献により、アスターナ古墓群の発掘とその遺品について、最近までの成果をまとめた。(上野)

B 科学研究費

1. 「戦後における日本・東洋美術史学の発達に関する研究」(一般研究(A) 研究代

調査研究

表者 上野アキ 分担者情報資料部、美術部研究員15名)

本年度は本研究の第2年度にあたり、当初の計画に従って順調に進行した。本年度は最新の研究成果に基づく各種図書図録類及び本研究に不可欠の論文集・目録類のほか、地方史関係の近刊書の購入を行い、最近の美術史学の業績を細部にわたって検討した。今日までに3万枚の文献カードについて所定の項目の記入を終り、カードセクターをも用いて分析を行った結果、年とともに変化する研究方法、研究領域、問題意識等につき、顕著な推移が認められた。

2. 「中世絵画・彫刻作家資料の収集と研究」(一般研究(A) 研究代表者 宮次男) 分担課題

- (1) 仏師及びその系譜に関する研究(久野・猪川)
- (2) 絵仏師の伝記並びにその流派の研究(柳沢・関口)
- (3) 絵師の伝記とその画系についての研究(宮・田村・江上・米倉)
- (4) 水墨画家伝の研究(鶴田)

本研究は、わが国中世(鎌倉～室町時代)の絵画・彫刻・書等の作家に関し、作品は勿論、信頼できる文献、造像銘、奥書、賛、落款、印章等から、その作家に関する資料を収集し、整理研究することによって、当該年代の作家の伝記、系譜、作品等の実体を明らかにすることを目的とする。

絵画分野では筆者の判明する作品の調査・撮影に重点を置いた。

a 絵仏師関係 鎌倉初期の託摩俊賀筆神護寺藏真言八祖像8幅の調査、写真撮影を実施し、特に赤外線写真やX線写真を併用して、その材質・技法等を明らかにすると共に、それらが俊賀1人の筆でないことも確かめ得た。また、俊賀関係資料の収集にも努めた。

b 絵師関係 絵巻の調査を行い、特に東寺蔵の行忠ら4筆弘法大師行状絵巻12巻、清涼寺蔵の伝え信筆釈迦堂縁起6巻、寂濟ら6筆融通念仏縁起2巻、東大寺蔵の琳賢筆大仏縁起3巻、亮順筆二月堂縁起2巻、執金剛神縁起3巻について全巻の写真撮影を行った。

彫刻の分野では、まず従来発表されている論文及び図書に収録されている造像銘を網羅的にコピーし、年代順に整理した。中世の造像銘はすこぶる多いが、これらの中には、彫刻作家資料として最も信頼のおけるものを含んでいる。この作業は本年度に

情報資料部・主要研究業績

においてかなり進み、来年度からは、各県教育委員会に依頼して関係資料写真の提供を受けると共に、写真のない作品は新たに撮影を行い、完備した資料にすることに努めた。その一環として、静岡県願成就院の運慶作不動三尊の胎内より新出の銘札について調査撮影した。

6 主要研究業績

①：著書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他
昭和52.4～昭和53.3

美術部

川上 涇（美術部長）

- ② 中国の山水画 みずのわ 34号 52. 9

関 千代（主任研究官）

- ① 小林古径 「巨匠の名画」16 学習研究社 52. 5
③ 青邨の武者絵 武道 125～134号 52. 4～53. 1

田村 悦子（主任研究官）

- ① 藤原行成 白氏詩巻・本能寺切 日本名跡叢刊 12 二玄社 52. 9
④ 樽の単位は材か村か—藤原佐理書状「去夏状」— 美術部研究会 52. 7

柳沢 孝（主任研究官）

- ② 東寺の国宝両界曼荼羅 西武美術館「曼荼羅展」目録 52. 7
② 阿弥陀三尊及童子像（法華寺蔵） 大和古寺大観 5 岩波書店 53. 3
④ 保延造営の永久寺真言堂障子絵—真言八祖行状図を中心として— 美術史学会第30回全国大会 52. 5

猪川 和子（主任研究官）

- ② 岡寺如意輪観音像 ミュージアム 320号 52. 11
③ 四天王彫像 四天王寺 448号 53. 2
③ 京都浄瑠璃寺伝広目天像X線透過撮影報告 特定研究52年度報告書 53. 2
④ 岡寺本尊調査報告 美術部研究会 52. 10

調査研究

- ⑤ 四天王彫像 四天王寺夏期大学講座 52. 7

田実 栄子（主任研究官）

- ② 東照公の胴服について 大日光 47号 52. 5
 ② 新資料 紀州東照宮の服飾類 下一紀州東照宮服飾類調査報告1—
 美術研究 308号 53. 3
 ⑤ 絞り染及び絞り文様 和装指導者養成研修会 52. 10
 ⑤ 縞と緋及び縞・緋文様 和装指導者養成研修会 52. 11

陰里 鉄郎（主任研究官）

- ① 日本の印象派 「原色現代日本の美術」5 小学館 52. 11
 ② 黒田清輝の人と作品 石川県美術館「黒田清輝展」目録 52. 5
 ③ フォンタネージと浅井忠 現代の眼 275号 52. 10
 ④ 黒田清輝についての2, 3の問題 美術部研究会 52. 10
 ④ フォンタネージと工部美術学校 美術史学会例会シンポジウム 52. 10
 ⑤ 黒田清輝と近代美術 石川県美術館 52. 6
 ⑤ 日本近代洋画と黒田清輝・有島生馬の画業 鹿児島市立美術館 52. 11
 ⑤ 黒田清輝「舞妓」 NHK教育TV 53. 3
 ⑥ 司馬江漢『訓蒙画解集』（校訂菅野陽）書評 三彩 362号 52. 10
 ⑥ 松本竣介と『雑記帳』の復刻 絵 167号 53. 1

久野 健（第一研究室長）

- ② バーマン東大仏と鎗石 国華 1002号 52. 7
 ② 信濃の渡来文化 朝鮮文化 36号 52. 12
 ② 近江の半跏思惟像 史迹と美術 481号 53. 2
 ④ 古代小金銅仏の技法について
 科学研究費特定研究「古文化財」総会 53. 2
 ⑤ 日本の小金銅仏と朝鮮三国仏 韓国東国大学校 52. 4

関口 正之（第一研究室）

- ⑤ 日本の仏教絵画 千葉県夷隅郡文化財委員研修会 52. 5
- ⑤ 阿弥陀院旧蔵の障壁画 美術部研究会 52. 7

中村伝三郎（第二研究室長）

- ② 近代日本彫刻の流れ 東京芸術大学蔵品図録・彫刻 52. 6
- ③ 「岡田三郎助展」開催の意義 絵 163号 52. 9
- ③ 画業60年・望月春江展によせて 山梨日日新聞 52. 9
- ③ 中村忠二の画業と私 兵庫県立近代美術館・同回顧展目録 53. 1
- ③ 晩成・奇跡の画家・鷺田新太氏を偲ぶ アサヒギャラリー 34号 53. 3

芸 能 部

三隅 治雄（芸能部長）

- ① 日本祭祀研究集成第5巻（坪井洋文共編著） 52. 8
- ① 日本祭礼地図Ⅲ（本田安次・榎本由喜雄・田原久・木下忠・原浩一共編著） 52. 12
- ① 祭りの情念 三一書房 52. 12
- ② 国譲り神話と民俗祭祀—古事記の芸能世界—『古事記』所収 社会思想社 52. 9
- ② 民俗芸能の死と再生 伝統と現代 50号 53. 1
- ② 語り物の民衆芸能化—語る芸・読む芸・話す芸— 口承文芸研究1号 53. 2
- ② 民俗芸能ととこよ信仰—神と人と劇の触れ合い— 文学2月号 53. 2
- ③ 東京都の民俗芸能 とうきょう広報5月号 52. 5
- ③ 大道芸と庶民 とうきょう広報11月号 52. 11
- ③ 私の提言「音無しの構え」 演劇界 52. 6
- ③ 花とアニメ『挿花百規』 主婦の友社 53. 1
- ④ 共同研究「山家鳥虫歌」（仲井幸二郎・清崎敏郎・中尾達郎・西村亨） 芸能 52. 4～53. 3

調査研究

- ④ 房総地方の念仏芸能 日本民俗学会 52. 12
- ⑤ 読む芸と話す芸 日本口承文藝学会設立大会記念講演 52. 5
- ⑤ 民謡の歴史と知識 日本民謡協会 52. 9
- ⑤ 旅にみる伝統芸能の系譜 NHK教育 53. 9
- ⑤ 民俗芸能の指定と保存 東京都文化財指導者講習会 52. 11
- ⑤ メロディ・にっぽん (監修)
放送番組センター・東京12チャンネル 53. 1~3

佐藤 道子 (演劇研究室長)

- ② 祖師会の史的研究 芸能の科学 9 53. 3
- ⑤ メロディ・にっぽん 寒行の声明一声楽の源流—
放送番組センター・東京12チャンネル 53. 2

羽田 昶 (演劇研究室)

- ② 1976年の能楽界 早大演劇博物館年報 52. 5
- ② 天正狂言本に見る囃子事 華泉 29号 52. 10
- ② 狂言の脚本構造—小段分析の試み— 芸能の科学 9 53. 3
- ③ 落葉・野宮・老松 能楽鑑賞の会プロ 52. 5~11
- ③ 能, 日本の仮面劇 ASIAN CULTURE No. 17 52. 8
- ③ 止動方角と蚊相撲 芸団協公演プロ 53. 3
- ③ 狂言取り舞踊略史 花柳寿南海とおどりを研究する会プロ 53. 3
- ⑤ 能の音楽 東京学生観能会公開講座 52. 5
- ⑤ 能の流儀差 東京学生観能会公開講座 52. 11
- ⑤ メロディ・にっぽん 幽玄の秘密—能の伝承—
放送番組センター・東京12チャンネル 53. 3
- ⑥ 狂言一笑いと風刺の世界— CBソニー・レコード (構成・解説) 52. 12
- ⑥ 能評・翁, 玉井ほか 能楽タイムズ 53. 3

主要研究業績

松本 雍（演劇研究室）

- ② 狂言の“神楽”について 華泉 28 52. 6
- ③ 能の囃子について 能楽鑑賞の栞 18・20 52. 5
- ③ 曲目解説「杜若」 能楽鑑賞の栞 21 53. 3
- ⑥ 三つの競演—11月の舞台から— 能楽タイムス 53. 1

柿木 吾郎（音楽舞踊研究室長）

- ② 長唄「小鍛冶」に見る流派性—今藤派と研精会派の比較分析— 芸能の科学 9 53. 3
- ② 目黒ばやし音楽調査記録 東京無形文化財研究会 53. 3
- ② かり干し切り歌 季刊邦楽 52. 6
- ③ 生活の中の楽器 音楽芸術 6月号 52. 6
- ③ 生活から失われた楽器 音楽芸術 7月号 52. 7
- ③ 生活と共に歩む楽器 音楽芸術 8月号 52. 8

横道萬里雄（音楽舞踊研究室）

- ② 長唄鳴物の古型 芸能の科学 9 53. 3
- ⑤ 能の囃子 大阪能楽鑑賞会講座 52. 8
- ⑤ 狂言・演技の広がり 芸能部公開学術講座 52. 12
- ⑤ 間の研究 伝統芸術の会 52. 12
- ⑤ 中世前期の芸能 朝日カルチャーセンター 52. 12

山本 宏子（音楽舞踊研究室）

- ② 朝花と三味線について 芸能の科学 9 53. 3
- ② Thailand (transcriptions) “Asian Musics in an Asian Perspective” 52. 12

中村 茂子（民俗芸能研究室）

- ③ 民俗芸能の仮面 ASIAN CULTURE No. 17 52. 8

調査研究

- ⑤ メロディ・にっぽん—神々との語らい・春迎えの神楽—

放送番組センター・東京12チャンネル 53. 2

仲井幸二郎（民俗芸能研究室）

- ① 民謡の女 実業之日本社 52. 4
 ③ 「郷土芸能復刻版」書評 芸能 5月号 52. 5
 ③ 民謡58曲の解説 ビクターレコード 52. 5
 ③ 日本の民謡—その発生と変遷— ビクターレコード 52. 5
 ③ 津軽三味線の魅力 ビクターレコード 52. 5
 ③ 「鑑賞日本古典文学・歌謡Ⅱ」書評 芸能 9月号 52. 9
 ③ 民謡・芸能・民俗—近世の出羽路— 江戸時代図誌 8 52. 11
 ③ 「尋常小学唱歌」の周辺 日本通信教育連盟 53. 1
 ④ 山家鳥虫歌（共同研究） 芸能 52. 4～53. 3
 ⑤ 童唄物語 テレビ神奈川 52. 5
 ⑤ 童唄のフォクローア 台東三田会 52. 6
 ⑤ 民謡のもつ心 日本民謡協会旭川講習会 52. 7

保存科学部

江本 義理（保存科学部長）

- ② 1. 壁画に関する材質分析（分担）
 2. 石室内の土壌について（分担，見城敏子と共著）
 勝田市史，「虎塚壁画古墳」 53. 3
 ② 馬絹古墳石室の保存科学的調査報告
 馬絹古墳保存活用計画調査報告書 53. 3
 ② 鉄-57のメスバウアー分光法による古代カワラの状態分析（竹田・馬淵・
 富永と共著） 分析化学 26（8） 52. 8
 ② 日の出土瓦窯跡群出土瓦のけい光X線分析（馬淵久夫と共著）
 保存科学 17号 53. 3
 ② 国宝・東大寺（金堂大仏殿）鷗尾漆箔銅板の腐食状態に関する研究（石川

主要研究業績

- 陸郎と共著) (受託研究報告第44号) 保存科学 17号 53. 3
- ③ 古文化財と木材 1~2 木材工業 33巻, 1~2号 53. 1~2
- ④ 石室内の折出物と環境 (三浦定俊と共同)
第7回文化財保存修復研究協議会 52. 9
- ④ Coloring Technique and Repaire Methods for Wooden Cultural Properties. (西川杏太郎と共同)
International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property—Conservation of Wood— 52. 11
- ④ 新設展示・収蔵施設の汚染因子と収納文化財への影響
科学研究費特定研究「古文化財」昭和52年度研究発表会 53. 3
- ⑤ 美術工芸品と環境
昭和52年度文化財(美工)管理研究協議会 福井・大分 52. 5
- ⑤ 収蔵室・展示施設の条件と環境整備
昭和52年度指定文化財展示取扱い講習会(後期) 東日本 52. 7
西日本 52. 12
- ⑤ 保存科学概論
昭和52年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(遺物保存科学課程) 52. 10
- 見城 敏子(主任研究官)
- ② 出土木製漆器の理科学的分析(分担)
佐賀県基盤整備事業に係る文化財確認調査報告書 52. 3
- ② 御坊山3号墳・塚穴山古墳の漆片の化学調査
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 52. 3
- ② 文化財の材質に対する防腐剤防虫剤の影響
〔I〕 ホストキシンの材質への影響
〔II〕 パナプレート の材質への影響
古文化財の科学 52. 8
- ② Effect of Humidity on the Hardening of Lacquer
International Symposium on the Conservation and Restoration

調査研究

- of Cultural Property—Conservation of Wood— 52. 11
- ② メスリ山古墳出土の翼状飾付石製品に塗られていた漆状品の分析
奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 52. 2
- ② 漆の分析に関する研究（第1報比重差を利用する分離）
保存科学 17号 53. 3
- ② 古墳の保存科学的調査
石室内の土壌について
石室内の温湿度について
勝田市史「虎塚壁画古墳」 53. 3
- ② 石室密閉後の状況
石室内の温湿度について、空気の化学調査(1)
勝田市史「虎塚壁画古墳」 53. 3
- ⑤ 漆塗装における湿度の影響
共催 色材協会中部支部・石川県工業試験場・輪島漆器振興協議会
- ⑥ 文化財研究の楽しみ 塗装技術 16巻9号 52. 9
- ⑥ 現代うるし考 塗装技術 16巻11号 52. 11

馬淵 久夫（化学研究室長）

- ② 鉄-57のメスバウアー分光法による古代カワラの状態分析（竹田・江本・富永と共著）
分析化学 26(8) 525~531 (1977)
- ② A Tin-119 Mössbauer Study of Chinese Bronze Coins（竹田、富永と共著）
Radiochem. Radioanal. Letters 29(4) 191~198 (1977)
- ② 日の出山窯跡群出土瓦のけい光X線分析（江本と共著）
保存科学 17号 53. 3
- ③ 同位体化学的手法による考古学試料の産地推定
化学の領域 31(10) 32~38 (1977)
- ③ 宇宙核化学の最近の進歩 化学 33(4) 322~323 (1977)
- ④ 古銭中の主成分及び微量元素の放射化分析による定量（西松、野津、不破共同）
第38回分析化学討論会 52. 5

- ④ Characterization of Ancient Japanese Ceramics by Mössbauer

Spectroscopy (富永, 竹田, 江本共同)

26 th International Congress of Pure and Applied Chemistry 52. 9

門倉 武夫 (化学研究室)

- ② 如庵 (国宝) 及び旧正伝院書院 (重要文化財) の被覆燻蒸 (森八郎と共著)

古文化財の科学 20, 21号 52. 8

- ② 古墳の保存科学的調査 発掘時の「石室内空気の化学的調査」石室密閉後の「石室内空気の化学的調査」

勝田市史「虎塚壁画古墳」 53. 3

石川 陸郎 (物理研究室)

- ② 国宝・東大寺大仏殿, 鷗尾・漆箔銅板の腐食状態調査報告

受託研究報告・保存科学 17号 53. 3

- ③ 照明の手引き 展示照明と列品の劣化 古文化財の科学 20・21号 52. 8

- ④ ファイバースコープによる仏像体内の調査

科学研究費特定研究「古文化財」研究会 53. 2

- ⑤ 博物館と照明について

東京都博物館協議会・日本博物館学会 53. 2

三浦 定俊 (物理研究室)

- ② セオライトを入れたアクリル箱内の温湿度分布 保存科学 17号 53. 3

- ③ 鎌倉の大仏とRI

Isotope News 52.10

- ④ 石室内の析出物と環境 (江本義理と共同)

第7回文化財保存修復研究協議会 52. 9

- ④ Characters of the wooden box for conserving picture scrolls with regard to temperature and humidity

International Symposium on the Conservation and Restoration
of Cultural Property—Conservation of Wood—

52.11

- ④ 表面含水率パターンによる内部状態の推定 (三浦・稲村・豊田共同)

第3回リモートセンシングシンポジウム 52.11

調査研究

④ 実験庫内温度分布と断熱の効果

科学研究費特定研究「古文化財」昭和52年度研究発表会 53. 2

新井 英夫（生物研究室長）

② 文化財の保存科学と生物(1), (2) 化学と生物, 15巻 5号, 6号 52. 5

② ヨーロッパにおける最近のシロアリ事情（森八郎と共同）

しろあり, 29号 52. 8

② 唐招提寺展の展示品の燻蒸（森八郎と共同）

古文化財の科学, 20・21号 52. 8

② 微生物による被害と対策（文化財） 防菌防霉誌, 5巻, 11号 52. 11

② 虎塚古墳における微生物学的調査（共著）

勝田市史「虎塚壁画古墳」茨城県勝田市発行 53. 3

④ Biodeterioration of Wooden Cultural Properties and its Control

International Symposium on the Conservation and Restoration

of Cultural Property—Conservation of Wood— 52. 11

⑤ 古墳における微生物学的問題 文化財保存科学研究協議会 52. 9

⑤ 防殺虫・霉の知識, 第2回（後期）指定文化財展示取扱講習会

文化庁美術工芸課主催 52. 12

⑤ 国外における石造物の保存科学的研究

古文化財自然科学研究会例会 52. 10

⑤ 燻蒸剤の殺菌効果ならびに低毒性薬剤の検討

科学研究費特定研究「古文化財」昭和52年度研究発表会 53. 2

森 八郎（生物研究室）

② シロアリ被害と防除法 建設資料 30巻4号 52. 4

② ヒラタキクイムシとその防除

生活と環境（日本環境衛生センター）5号 52. 5

② 唐招提寺展の展示品の燻蒸について（新井英夫と共著）

古文化財の科学 20・21号 52. 8

主要研究業績

- ② 如庵（国宝）及び旧正伝院（重要文化財）の被覆燻蒸（門倉武夫と共著）
同上 20・21号 52. 8
- ② 建築用材料の耐蟻性試験（町田和江と共著） しろあり 29号 52. 8
- ② ヨーロッパにおける最近のシロアリ事情（新井英夫と共著） 同上 52. 8
- ② 木造建築物の蟻害と腐朽の探知診断法 同上 30・31号 53. 1
- ② 新種クシモトシロアリ *Glyptotermes kushimensis* MORI sp. nov.
同上 32号 53. 2
- ④ 文化財の虫微害防除法の開発（虫害）
科学研究費特定研究「古文化財」昭和52年度研究発表会 53. 3
- ④ Biodeterioration of Wooden Cultural Properties and its Control
International Symposium on the Conservation and Restoration
of Cultural Property—Conservation of Wood— 52. 11
- ⑤ 建築物の虫害 しろあり対策ゼミナール講演
日本しろあり対策協会 52. 8
- ⑤ シロアリ燻蒸仕様書 シロアリ燻蒸実務講習会講演
日本しろあり対策協会 52. 9
- ⑤ シロアリの昆虫学的知識 シロアリ防除施工講習会講演
日本しろあり対策協会、福岡 53. 1
- ⑤ 同 上
同 上 東京 53. 2
- ⑤ キクイムシとシロアリ 日本しろあり対策協会熊本支所講演 53. 3
- ⑤ シロアリ (社)日本環境衛生センター講習会講演 53. 3

修復技術部

西川杏太郎（修復技術部長）

- ① BUGAKU MASKS KŌDANSHA INT. SHIBUNDŌ 53. 3
- ① 日本彫刻史基礎資料集成 平安時代重要作品篇Ⅲ（共編）
中央公論美術出版 53. 1
- ② 鎌倉時代の肖像彫刻とその特質 国華 1001号 52. 6

調査研究

- ③ 阿弥陀如来像他（元興寺極楽坊），薬師如来像（元興寺） 大和古寺大観 3
岩波書店 52.10
- ③ 中宮寺の歴史・菩薩半伽像 大和古寺大観 1 岩波書店 52.10
- ⑤ 史料取扱いの科学 国立史料館近世史料取扱講習会 52.10

中里 寿克（主任研究官）

- ② 平安時代漆芸技法史序論 ミュージアム 320号 52.11
- ② Techniques for and Restoration of Urushi
Art (Japanese Lacquer Art)

International Symposium on the Conservation and Restoration
of Cultural Property—Conservation of Wood— 52.11

- ② 大樹寺障壁画の保存処置研究（樋口清治と共著）（受託研究報告）
保存科学 17号 53. 3
- ② 平安時代漆芸技法資料 VII 保存科学 17号 53. 3

西浦 忠輝（第一修復技術研究室）

- ④ 古建築修復用人工木材の物性 <特にアラルダイト XN 1023 について>
科学研究費特定研究「古文化財」昭和52年度研究発表会 53. 3

青木 繁夫（第一修復技術研究室）

- ② オランダ渡り銘酒瓶の修復 保存科学 17号 53. 3
- ② 源義賢墓の修復処置について（受託研究報告）
保存科学 17号 53. 3

樋口 清治（第二修復技術研究室長）

- ② 重要文化財大樹寺障壁画保存処置（中里寿克と共著）（受託研究報告）
保存科学 17号 53. 3
- ④ Consolidation and Restoration of Damaged
Wooden materials With Synthetic Resins

主要研究業績

- International Symposium on the Conservation and Restoration
of Cultural Property—Conservation of Wood— 52. 11
- ⑤ 科学的修理について 昭和52年度（前期）指定文化財取扱い講習会 52. 7
- ⑤ 文化財修理と合成樹脂 古文化財化学研究会例会 52. 8
- ⑤ 遺物保存科学 昭和52年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修会 52. 10
- ⑤ 保存科学＜合成樹脂の知識＞ 昭和52年度（後期）指定文化財取扱い講習会 52. 12
- ⑤ 文化財修理における科学的処理 昭和52年度文化財建造物保存事業主任技術者第二回研修会 53. 3

増田 勝彦（第二修復技術研究室）

- ③ ベニス東洋美術館日本絵画の調査とローマでの修理技術
デモンストレーション 保存科学 17号 53. 3
- ③ 文化財保存修復国際センターに留学して
—壁画保存修復コース— 月刊文化財 16 53. 3

情報資料部

上野 アキ（文献資料研究室長）

- ② アスターナ墓群「中国の美術と考古」 六興出版 52. 9
- ④ キジル第3区マヤ洞壁画の在米資料 美術部研究会 52. 6
- ⑤ 日本所在の韓国仏画 韓国芸術院第6回アジア芸術シンポジウム 52. 10

宮 次男（主任研究官）

- ① 合戦絵巻 角川書店 52. 11
- ① 後三年合戦絵詞（小松・古谷共著） 中央公論社 52. 11
- ② 古代中世秘画絵巻考 アート・トップ 39 52. 4
- ② お伽草子絵巻—その画風と享受者の性格— 国文学 22-16 52. 12
- ③ 日本美術史回顧と展望（中世） 史学雑誌 86-5 52. 5
- ⑤ 鎌倉時代の絵巻 朝日カルチャー・センター 52. 12

調査研究

江上 綏(文献資料研究室)

- ① 講座・比較文化 第5巻日本人の技術(共著) 研究社出版 52. 7
- ② 平家納経と宗達「光悦書宗達金銀泥絵」 朝日新聞社 53. 3
- ④ Historical Distribution of the Seigaiha Design and Its Prototype
カルフォルニア大学(バークレー) 52. 11
- ⑤ Seigaiha: Ancient Water Design in Asia サンディエゴ美術館 52. 11

鶴田 武良(文献資料研究室)

- ① 東洋の美術Ⅰ(宮川寅雄他と共著) 旺文社 52. 4
- ⑥ 呉昌碩とわが国文墨界 出版ダイジェスト 866 52. 6

河野 元昭(文献資料研究室)

- ① 若沖・蕭白「日本美術絵画全集23」(共著) 集英社 52. 10
- ② 呉春筆林間帰漁図・柳陰帰漁図屏風 国華 999 52. 4
- ② 宗達の伝記資料と研究史「琳派絵画全集 宗達派1」
日本経済新聞社 52. 4
- ② 俵屋宗達の落款「琳派絵画全集 宗達派2」 日本経済新聞社 53. 1
- ③ 歌川広重筆喜鶴堂版東都名所「広重北斎諸国名所絵集」 学研 52. 7
- ③ 宗達光琳派(共著)「文化財講座日本の美術3」 第一法規出版 52. 11
- ③ 待合の掛物一円山四条派一 漆交 32-1, 2 53. 1
- ⑤ 尾形光琳(長寿大学講座7) 文京区社会教育館 52. 5
- ⑤ 江戸狩野と文人画 八王子市資料館 52. 10
- ⑤ 江戸時代絵画と写生(美術部公開講座) 日経ホール 52. 11
- ⑥ 光悦年譜・文献「光悦書宗達金銀泥絵」 朝日新聞社 53. 3

7 その他の研究活動

ほかの機関における講義など

(氏名)	(機関名)	(期間)	(担当科目)
川上 逕	東京大学東洋文化研究所非常勤講師	(52. 10. 1~53. 3. 31)	宋元仏画

主要研究業績

	青山学院大学文学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	東洋美術史
中村伝三郎	埼玉大学大学院文化科学研究科非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	美術交流史
田村 悦子	青山学院大学非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	書道史
柳沢 孝	東京大学文学部非常勤講師	(52. 4. 1~52. 9.30)	文化交流
	大阪大学文学部非常勤講師	(52.10.16~53. 3.31)	日本美術史
猪川 和子	帝京大学文学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	日本美術史
田実 栄子	お茶の水女子大学家政学科非常勤講師	(52. 4. 1~52.10.10)	服飾史
陰里 鉄郎	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	日本美術史
関口 正之	千葉工業大学非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	文芸学・美術学
上野 アキ	聖心女子大学非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	東洋美術史
宮 次男	青山学院大学非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	日本美術史
江上 纒	埼玉大学教養学部非常勤講師	(52.10. 1~53. 3.31)	日本の芸術
鶴田 武良	成蹊大学経済学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	中国絵画史
河野 元昭	東海大学教養学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	日本美術史
米倉 迪夫	三重大学教育学部非常勤講師	(52. 8.26~52. 9. 1)	日本美術史
江本 義理	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(52.10. 1~53. 3.31)	保存科学
馬潤 久夫	東京大学工学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	放射化学
西川杏太郎	東京芸術大学美術学部非常勤講師	(52. 4. 1~53. 3.31)	修復技術史

8 学位授与

本研究科職員で本年度において学位を授与された者は次のとおりである。

種 別	授与大学	授与年月日	官 職	氏 名
文学博士	東北大学	52. 6. 23	文部技官，情報資料部主任研究官	宮 次男
工学博士	日本大学	52.11. 30	文部技官，保存科学部主任研究官	見城 敏子

Ⅵ 事 業

1 出 版

(1) 美術研究

昭和7年1月創刊・当所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌であって、主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときには所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版、各号本文40頁原色図版1、単色図版8で、現在まで306号を刊行した。昭和52年度は、次のとおりである。

美術研究 307号 昭和53年1月 編集

<論説>

平治物語絵（常磐巻）について

真保 亨

<図版解説>

天理・旧松永本『源氏物語絵巻』詞書（桐壺）断簡

—熱海美術館蔵国宝⁴年鑑「翰墨城」所収—

田村 悦子

<研究資料>

近百年来中国画人資料四

鶴田 武良

美術研究 308号 昭和53年3月 編集

<論説>

キジル日本人洞の壁画

—ル・コック収集西域壁画調査(一)—

上野 アキ

藤原佐理書状 去夏帖について

—一博の単位は材か村か—

田村 悦子

(2) 芸能の科学

芸能の科学 9（芸能論考Ⅳ）

本年度は、芸能論考集として下記の諸論文を収録し、刊行した。

祖師会の史的研究

佐藤 道子

狂言の脚本構造 一小段分析の試み一

羽田 翹

長唄鳴物の古型

横道萬里雄

長唄「小鍛冶」に見る流派性 一今藤派と研精会派の比較分析一

柿木 吾郎

朝花と三味線について

山本 宏子

音盤目録Ⅲ

芸能部所蔵「安原コレクションレコード」の中、音盤目録Ⅰ（義太夫節）・音盤目録Ⅱ（演劇）のあとを受けて、音楽部門の所蔵目録を完成・刊行した。

(3) 保存科学

昭和39年3月創刊による保存科学部・修復技術部の機関誌で、年1回の刊行により先年度までに第16号までを発行した。内容は所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告等である。なお、本年度は第17号を発行した。

保存科学17号 昭和53年3月発行

- | | |
|---|-----------|
| (1) 日の出山窯跡群出土瓦のけい光X線分析 | 馬淵久夫・江本義理 |
| (2) 漆の分析に関する研究（第1報）一比重差を利用する分離一 | 見城 敏子 |
| (3) ゼオライトを入れたアクリル箱内の温湿度分析 | 三浦 定俊 |
| (4) 平安時代漆芸技法資料Ⅶ一海賦時絵袈裟箱一 | 中里 寿克 |
| (5) オランダ渡り切子ガラス酒瓶修復について | 青木 繁夫 |
| (6) 大樹寺障壁画の保存処置 受託研究報告第43号 | 樋口清治・中里寿克 |
| (7) 国宝東大寺大仏殿・島尾漆箔銅板の腐食状態調査報告
受託研究報告第44号 | 江本義理・石川陸郎 |
| (8) 源義賢墓の修復処置について 受託研究報告第45号 | 青木 繁夫 |
| (9) ベニス東洋美術館日本絵画の調査とローマでの修理技術
デモンストレーション | 増田 勝彦 |
| (10) 昭和52年度修復処置概報 | 修復技術部 |

事業

(4) その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和7
吉備大臣入唐絵詞	(美術研究資料第2輯)	昭和9
徽宗摹張萱搗練図	(美術研究資料第3輯)	昭和10
鳳凰堂雲中供養仏	(美術研究資料第4輯)	昭和11
桃山時代金碧障壁画	(美術研究資料第5輯)	昭和12
富貴寺壁画	(美術研究資料第6輯)	昭和13
印度及南部アジア美術資料	(美術研究資料第7輯)	昭和14
光悦色紙帖	(美術研究資料第8輯)	昭和14
菱田春草	(美術研究資料第9輯)	昭和15
能恵法師絵詞	(美術研究資料第10輯)	昭和16
宮素然筆明妃出塞図巻	(美術研究資料第11輯)	昭和16
日本美術資料	第1輯	昭和13
日本美術資料	第2輯	昭和14
日本美術資料	第3輯	昭和15
日本美術資料	第4輯	昭和16
日本美術資料	第5輯	昭和17
近代日本美術資料	第1輯	昭和23
近代日本美術資料	第2輯	昭和24
近代日本美術資料	第3輯	昭和26
墨跡資料集	第1輯	昭和24
墨跡資料集	第2輯	昭和24
墨跡資料集	第3輯	昭和26
源氏物語絵巻		昭和24
黒田清輝素描集		昭和24
栄山寺八角堂		昭和25
栄山寺八角堂の研究		昭和26

出 版

法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		昭和28
黒田清輝作品集		昭和29
高雄曼荼羅		昭和41
明治美術基礎資料集		昭和50
東洋術美文献目録	明治以降昭和10年まで	昭和16
東洋美術文献目録続編	昭和11年～同20年	昭和23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	昭和29
美術研究索引	第1号～第100号	昭和16
美術研究総目録	第1号～第230号	昭和40
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで（再刊）	昭和42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	昭和44

ほかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷 美術研究所編	便利堂	昭和32
醍醐寺五重塔の壁画 高田 修編	吉川弘文館	昭和34
平安時代世俗画の研究 秋山光和著	吉川弘文館	昭和39
近代日本美術の研究 隈元謙次郎著	大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝 隈元謙次郎著	日本経済新聞社	昭和41
扇面法華経 秋山光和 柳沢 孝著 鈴木敬三	鹿島出版会	昭和47
金字宝塔曼陀羅 宮 次男著	吉川弘文館	昭和50

芸 能 部

標準日本舞踊譜		昭和35
音盤目録 I		昭和40
芸能の科学 1 一芸能資料集 1 一四世鶴屋南北作者年表		昭和41
芸能の科学 2 一芸能資料集 2 一鮫の神楽台本集成		昭和41

事業

音盤目録Ⅱ			昭和45
東大寺修二会	観音悔過（お水取り）		
	東京国立文化財研究所芸能部監修	ビクターレコード	昭和46
芸能の科学3	—芸能論考Ⅰ		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和47
芸能の科学4	—芸能資料集Ⅲ		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和48
芸能の科学5	—芸能論考Ⅱ		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和49
芸能の科学6	—芸能調査録Ⅰ「東大寺修二会の構成と所作」（上）		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和50
芸能の科学7	—芸能調査録Ⅱ「東大寺修二会の構成と所作」（中）		
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	昭和52
芸能の科学8	—芸能論考Ⅲ		
	東京国立文化財研究所芸能部編	キタムラ書房	昭和52

保存科学部（受託研究報告）

重要文化財円成寺本堂内陳彩色剝落どめ他18件	昭和35～昭和42
------------------------	-----------

修復技術部

表具の科学（特別研究・軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究報告書）

昭和53

2 黒田清輝巡回展

黒田清輝の全作品の殆んどを所蔵している本研究所にとって黒田清輝の功績を記念し併せて地方文化の振興に資するため、本年度から新しい事業として黒田清輝巡回展を毎年1回地方において開催することになった。

本年度は黒田清輝の生誕地である鹿児島市において開催された。

会 期 昭和52年11月1日～11月20日

会 場 鹿児島市立美術館（鹿児島市城山4—36）
主 催 東京国立文化財研究所・鹿児島市教育委員会・南日本新聞社
後 援 鹿児島県教育委員会・NHK鹿児島放送局・南日本放送鹿児島テレビ
開催日数 18日間
入場者数 11,279人
陳列点数 油彩32点，デッサン50点，写真パネル2点
目 録 A4判変型129頁，原色版6頁，単色版75頁
講演会 日時：11月3日 会場：県文化センター 演題：“明治絵画と黒田清輝” 講師：陰里鉄郎

3 公開学術講座

美術部

日 時 昭和52年11月12日（土） 13：30～16：30
会 場 日本経済新聞社小ホール（9階）
講 演 (1)萩原守衛について 美術部第二研究室長 中村伝三郎
(2)江戸時代絵画と写生 情報資料部文献資料研究室 河野 元昭

芸能部

日 時 昭和52年12月13日（火） 18：00～21：00
会 場 矢来能楽堂
講 演 (1)脚本の構造 演劇研究室 羽田 昶
(2)演技の広がり —舞歌と科白— 音楽舞踊研究室 横道萬里雄
実演「自然居士」—狂言様式による実験— 野村万之丞・野村万作
野村万之介・石田幸雄・野村葉子・一増仙幸

4 会 議

保存科学部・修復技術部

第7回文化財保存修復研究協議会

日 時 昭和52年9月21日～22日（2日間） 10：00～17：00

事 業

会 場 本研究所別館会議室

本年度は前年度に引き続き、『文化財の保存環境Ⅱ』として、第一日目は「古墳石室内の保存環境」、第二日目に「収蔵展示施設の保存環境」をそれぞれテーマとし、2日間にわたって報告及び討議を行った。出席者は文化庁から伊藤文化財鑑査官以下、記念物課、建造物課、美術工芸課、無形文化民俗文化課の担当調査官、東京国立博物館工芸課、考古課、東京芸術大学美術学部、更に関係機関として奈良国立文化財研究所、元興寺仏教民俗資料研究所、美術院国宝修理所から出席を得た。

第1日 主題；古墳石室内の保存環境

(発表課題・発表者)

1. 装飾古墳の保存について 文化庁文化財保護部記念物課 阿部 義平
2. 古墳整備の諸問題 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景調査室長 安原 啓示
3. 石室内の折出物と環境 保存科学部部長 江本義理
同物理研究室 三浦 定俊
4. 古墳石室内における微生物学的問題点 保存科学部生物研究室長 新井 英夫

第2日 主題；収蔵・展示施設の保存環境

1. 絵画・彫刻の損傷と保存環境
文化庁文化財保護部美術工芸課 文化財調査官 渡辺明義 同調査官 鷲塚泰光
2. 収蔵展示施設の設計計画の変遷(Ⅱ)
文化庁文化財保護部建造物課 文化財調査官 半沢 重信
3. 東洋館の展示環境 東京国立博物館学芸部東洋課長 長谷部楽爾
4. 展示用照明の諸問題 元保存科学部長 登石 健三

第7回文化財保存科学懇談会

日 時 昭和53年3月9日(木) 10:00~16:30

会 場 本研究所別館会議室

文化財の保存と修復に関し、保存科学部・修復技術部の調査研究が円滑に推進され、文化財保護事業に効果をもたらすことを目的として、文化庁文化財保護部長、文化財鑑査官、記念物課、建造物課、美術工芸課の課長及び担当技官の出席を得て、本年度の両部の特別研究、受託研究、一般研究の報告を行い、昭和53年度の両部の調査研究

計画を説明した。昨年度から始った特別研究「石造文化財の保存・修復に関する科学的研究」(3カ年継続)について文化庁側に協力を求め、また文化財保存修復研究協議会及び研究テーマの選択について具体的な意見交換を行った。

文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

昭和42年12月日本がユネスコの「文化財の保存及び修復の研究のための国際センター(ローマセンター)」に加盟して以来、文化財の保存と修復に関して世界各国関係機関との交流も急速に高まり、日本はアジアにおける文化財の保存及び修復についての中心的役割を果たさなければならない急務にあり、またこれら諸国との国際交流促進の必要を生じている。このためアジア及びヨーロッパの関係する研究者を招き国際研究集会を開催し討議することを目的とするものである。

今回の国際研究集会で海外からの専門家の選定については、ローマセンターの推せんにより、欧米2人、アジア4人の参加を得た。

なお、日程は次のとおりである。

名 称 文化財の保存及び修復に関する国際研究集会—木の保存—

(International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property —Conservation of Wood—)

日 時 昭和52年11月24日～28日(5日間)

24日～26日 講演・討議(国立社会教育研修所)

27日～28日 現地討議 奈良、京都各地

<演題及び発表者>

第1日

1. Biodeterioration of Wooden Cultural Property and its Control (木造文化財の生物劣化とその防除)

慶応大学名誉教授 森 八郎

2. Consolidation of Deteriorated Wooden Artifacts (劣化した木工芸品の強化)

環太平洋地域保存センター総長 A. E. ワーナー

3. Consolidation and Restoration of Damaged Wooden Materials with Synthetic Resins (合成樹脂による劣化木材の強化及び修復)

修復技術部第二修復技術研究室長 樋口清治

事 業

4. Structural Rehabilitation of Deteriorated Timber in Historic Building (歴史的建造物の劣化した木質部材の構造的修復)

カナダ国立公園局修復部上級修復専門官 ポール・ステューメス

5. Conservation of Water-logged Wooden Materials from the Nara Palace Site (平城宮跡から出土した水浸木材の保存処置)

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 沢田正昭

6. Conservation Problems of Water-logged Large Size Wooden Antiquities in Dacca Museum (ダッカ博物館にある大きな水浸木材の保存処置に関する問題点)

バングラディッシュ国立博物館長 エナムル・ハック

7. Conservation of Wooden Sculptures in Japan (日本における彫刻品の保存)

奈良国立博物館長 倉田文作

第2日

1. Technique of Wood Work in India (インドにおける木工芸技術)

インド国立文化財研究所長 O. P. アグラワル

2. Wood Worked Applied Arts Including Furnitures in Thailand (家具を含む木工芸品について)

タイ国立博物館コンサベーター チラボン・アラニヤナック

3. The Preservation of Wooden Antiquities in Indonesia (インドネシアにおける木製遺物の保存について)

インドネシア国立考古学研究センター調査専門家 S. スレーマン

4. Structural Reinforcements of Wooden Buildings (木造建造物の構造的補強)

京都大学工学部教授 金多 潔

第3日

1. Principles of Conservation and Restoration Regarding Wooden Buildings in Japan (日本における木造建造物の保存及び修復における原則)

所長 関野 克

なお、オブザーバーとして提出された報告は次のとおりである。

- On Tsugite, Shikuchi and Wood working Tools (継手、仕口及び木工具について)

て)

文化庁文化財保護部文化財鑑査官 伊藤延男

- Effect of Humidity on the Hardening of Lacquer (漆の硬化に及ぼす湿度の影響について)

保存科学部化学研究室主任研究室 見城敏子

- Characters of the Wooden Box for Conserving Picture Scrolls with Regard to Temperature and Humidity (絵巻物保存用木箱の温湿度に関する性質)

保存科学部物理研究室 三浦定俊

- Techniques for and Restoration of Urushi Art (漆芸技法と漆工品の修復)

修復技術部主任研究官 中里寿克

- Coloring Technique and Repaire Methods for Wooden Culturll Properties (木造文化財の彩色技法と修復方法について)

保存科学部長 江本義理 修復技術部長 西川杏太郎

- Deformation of Ancient Wooden Structures Caused by the Passage of time (古代木造建造物の経時的変形)

文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官 牛川喜幸

(出席者)

文化庁文化財保護部長他関係官、東京国立文化財研究所保存科学部、修復技術部関係者、その他、文化財保存関係研究者、技術者等50名

現地討議

奈良：東大寺大仏殿、薬師寺本堂・東塔、平城宮跡、法起寺五重塔、法隆寺本堂・五重塔、廻廊及び羅漢堂、今井町街並

京都：桂離宮、東福寺三門、美術院国宝修理所、京都国立博物館、産寧坂・祇園新橋
(伝統的建造物群保存地区)

5 国際交流

美術部

美術部出版物の諸外国との交換、及び外国の研究者との交流も活発に行われた。

大韓民国成鈞館大学校廉殷鉉教授は、国際交流基金の招聘により、日韓美術交流に

事業

について研究した。(51.6.20～52.6.19)

川上部長は、台北において元画及び明画等の調査を行った。(53.3.5～3.12)

久野第一研究室長と猪川主任研究官は、大韓民国ソウル、慶州等において、古代朝鮮の彫刻を調査した。(52.4.29～5.8)

柳沢主任研究官は、科学研究費海外学術調査「インド・イラン混成文化圏における大乘仏教美術の初期展開に関する学術調査（代表者 成城大学 高田修）に参加し、アフガニスタン、イラン、インドにおいて壁画を中心に、仏教美術の調査を行った。(52.7.31～10.18)

芸術部

柿木音楽舞踊研究室長は、文部省在外研究員(短期)として、イギリス、フランス及びイタリアの中核的大学、研究機関に訪問滞在し、各国における伝統音楽研究の現状と問題点について研究者と意見交換をし、研究文献・楽譜資料等を収集した。また伝統音楽の保存・普及に各国政府がどのような文化政策を施行しているかについても、あわせて調査した。(52.8.29～52.10.28)

保存科学部

保存科学部、馬淵久夫化学研究室長はフランス国立科学研究所(C.N.R.S.)の招聘により月の岩石の研究のためフランスへ出張、月の岩石研究と併せて文化財関係の研究所3ヶ所を視察した。(52.2.27～52.8.31)

また、第2回 CULON 博物館交流部会専門家会議が昭和52年11月7～9日文化庁主催により、外務省国際会議場において開催され、当所から、関野所長、江本保存科学部長、西川修復技術部長が参加した。

修復技術部

樋口清治第二研究室長は、ASPACの要請によりフィリピン各地の文化財保存のための調査に出張した。(52.4.18～52.5.12)

増田勝彦同研究室研究員は、UNESCOのコンサルタントとして、イタリアに出張、ベニス東洋美術館所蔵日本絵画の破損状況調査と、ローマ中央修復研究所における表

具技術のデモンストレーションを行った。(52.11.11～52.12.16)

西川杏太郎部長は、西ドイツケルン市立東亜美術館の招聘により、西ドイツに出張、同館での国際シンポジウムに出席、講演し、また西ベルリン国立博物館保存研究所を視察、意見交換を行った。(52.12.1～52.12.10)

情報資料部

外国の研究者で、来所し、研究上の意見を交換し、あるいは資料を利用して研究を行った人は多数にのぼった。

上野文献資料研究室長は大韓民国に出張し韓国仏画と西域資料について調査したほか、芸術院第6回アジア芸術シンポジウムに参加して、発表と討論を行った。(53.10.1～10.15)

宮主任研究官は、台北の故宮博物院において、同博物院所蔵の中国版経絵及び文字塔の調査研究を行った。(53.3.5～3.13)

江上研究員は大韓民国に出張し、古代文様資料について調査した。(52.4.29～5.8) また、米国、カナダ両国西海岸地域の東洋古代文様資料、日本古代中世絵画資料を調査し、カルフォルニア大学で共同研究を行った。(52.9.16～12.22)

鶴田研究員は中華人民共和国上海市及び広州市において、現代絵画の調査を行った。(52.3.6～3.18)

野久保技官は、アフガニスタンのパーミヤン、カブール博物館などの壁画の撮影、インドのアジャンタ、パールの壁画及びニューデリー国立博物館所蔵の中央アジア壁画、敦煌請来画の撮影で、成城大学仏教美術調査団に同行した。(52.7.31～10.18)

海外研究者の来訪

保存科学関係者、博物館関係者の保存科学部、修復技術部への施設視察及び意見交換、研修等のための来訪が本年度も多く18名に達した。

- | | |
|--------------------|--------------|
| ・ベルリン国立ラトゲン保存研究所長 | ヨーゼフ・リーデラー博士 |
| ・ソウル国立中央博物館課長 | 李蘭映女史 |
| ・フィレンツェ国立文化財研究所研究員 | パオロ・マッソーニ博士 |
| ・ワシントンスミソニアン研究所研究員 | ベラ・エスピノラ女史 |
| | マリオン・ケーラー女史 |

スイス・サンサフォリン (表具技術研修)	アネット・ジェントン女史
韓国政府文化財管理局研究所員	金炳虎氏
ソウル韓国民俗博物館研究員	李鐘哲氏
ピッツバーク・カーネギーメロン研究所教授	ロバート・フェラー博士
ワシントン フリアギャラリー保存科学部長	トム・チェース氏
同研究員	ジョン・ウィンター博士
ニューヨーク, ジャパンハウスギャラリー館長	ランド・カスティール氏
パリ, ポンピドーセンター研究員	クリスチャン・ココール氏
ストックホルム, 国立民族学博物館主任コンサベーター (日本染織の保存研修)	シエルスティ・グフタフソン女史
ソウル大学建築学科教授	尹張燮博士
ICOMOS会長	R・M・ルメール博士
チエニジア, パルド国立博物館コンサベーター	ゲルタニ・ナイラ女史

Ⅶ 研究施設・設備

1 蔵 書

美術部・情報資料部

日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたる研究書を中心に、関連図書、各種叢書、辞典類など和漢書(30,075)、洋書(3,684)計33,759冊のほか、各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書、美術関係雑誌、紀要類、売立目録、展覧会目録などを所蔵し、部内外及び研究所外の研究者の利用に供している。

芸 能 部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書4,289冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等の雑誌、丸本・謡本等の台本も収集している。

保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて1,976冊を所蔵している。

昭和51・52年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美術部 情報資料部		芸 能 部		保存科学部 修復技術部		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
昭和51年度	995冊	21冊	384冊	16冊	55冊	11冊	1,482冊
昭和52年度	1,007冊	58冊	296冊	—	23冊	48冊	1,432冊

2 資 料

美術部・情報資料部

実物よりの直接撮影による写真を含む写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をもおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本・東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ24万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム250巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸 能 部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには、毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レ コ ー ド	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 $\frac{mm}{m}$	16 $\frac{mm}{m}$	
昭和51年度 までの累計	6,171 枚	1,964 本	178 本	3 本	多 数
昭和52年度	48 "	147 "	20 "	0 "	"
計	6,219 "	2,111 "	198 "	3 "	"

3 機器・設備

美術部・情報資料部

機 器

1. X線透過撮影装置

- | | |
|-----------------------|----|
| (1) 可搬式ソフテックス装置 (J型) | 1式 |
| (2) 可搬式ソフテックス装置 (新J型) | 1式 |
| (3) 携帯用ソフテックス装置 (E型) | 1式 |

2. 紫外線照射装置

- | | |
|------------------------------------|----|
| (1) 可搬式照射装置 (フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) | 2台 |
| (2) 携帯用紫外線検査器 | 1台 |

3. 顕微鏡装置

- | | |
|--|----|
| (1) 双眼実体顕微鏡及び写真装置 | 1式 |
| (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置 (可動支持台及び携帯用スタンド) | 1式 |
| (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 | 1式 |

4. マイクロ写真関係設備

- | | |
|--|----|
| (1) マイクロ写真撮影装置 (付自動現像機, プリンター, 引伸機・乾燥機等) | 1式 |
| (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 | 1式 |
| (3) マイクロ読読機 (ルーモ社製) | 3台 |
| (4) リーダープリンター | 1台 |

5. デアスコープ (視聴覚教育装置)

1台

6. カメラ類

- | | |
|-------------------------|----|
| (1) リンホフカルダン | 1台 |
| (2) リンホフテヒニカ | 3台 |
| (3) コメット・ストロボC P-1200DX | 1台 |
| (4) 工業用ファイバースコープ | 1式 |

7. 引伸機

研究施設・設備

(1) オメガ (4×5)	2台
(2) フジA690	1台
(3) フジS69	1台
8. 複写台 コピースタンド (1300)	1台
9. 乾燥機 FCオート (全紙)	1台
10. ドライマウント シールコマーシャル210M	1台
ドライマウント シールコマーシャル70	1台
11. マルチカードセクター (HAC841S型)	1式
12. 複写機 ユービックス480	1台
13. 製本機 サーマンバインドT220	1台

芸 能 部

機 器

1. 分析機器	
(1) ビッチレコーダー	1台
(2) メログラフ BT型	1式
2. オーディオ関係機器	
(1) テープレコーダー	15台
(2) ビデオテープレコーダー	1台
(3) ステレオ音声調整卓	1台
(4) スピーカー	4台
3. 撮影・映写機器	
(1) 16mm撮影機	1台
(2) 16mm映写機	1台
(3) 8mm撮影機	4台
(4) 8mm映写機	2台
(5) 35mm写真機	6台
(6) 35mmマイクロフィルム解読装置	1台
(7) 16mmマイクロフィルム解読・複写装置	1台

機器設備

- (8) 16 $\frac{1}{2}$ マイクロ写真機 1台
- (9) 16 $\frac{1}{2}$ シネフィルム分析装置 1台
- 4. 照明器具
 - (1) スタジオ用照明器具 1式

保存科学部・修復技術部

機 器

- 1. 強度・劣化試験機
 - (1) サンシャインウェザーメーター（劣化促進試験機） 1台
 - (2) 万能試験機（島津，オートグラフ，インストロン型，10トン） 1式
 - (3) 回折格子光照射器 1台
 - (4) 紙耐揉強度試験機 1台
- 2. 顕微鏡装置
 - (1) 金属顕微鏡 1台
 - (2) 生物顕微鏡 2台
 - (3) 表面アラサ顕微鏡 1式
 - (4) 万能顕微鏡 1式
 - (5) 走査型電子顕微鏡（JSM—50A型） 1式
- 3. 分析装置
 - (1) ガスクロマトグラフ（ガス分析，水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分解装置付） 1式
 - (2) ポーターガスアナライザー（MIRAN—1型） 1式
 - (3) 回折格子自記赤外分光光度計 1台
 - (4) “ 赤外顕微鏡 1台
 - (5) 自動記録式示差熱天秤 1式
 - (6) 炭素・水素・窒素分析計 1式
 - (7) 光電分光光度計（自記） 1台
 - (8) 螢光X線分析装置（標準型及び非破壊用大型試料台つき） 1式
 - (9) 可搬式螢光X線分析装置（現場可搬用） 1式

研究施設・設備

- (10) X線回折装置及びデバイシェラーカメラ, ラウエカメラ(結晶同定) 1式
 - (11) 発光分光分析装置(M1型)(高圧整流スパーク, 直流アーク) 1式
 - (12) 質量分析計(JMB—05RB単収束型) 1式
 - (13) X線マイクロアナライザーSDS—269(JSM—50A附属) 1式
4. 非破壊検査装置
- (1) X線発生装置(60KVP, 4mA) 1式
 - (2) 工業用X線発生装置(200KVP, 8mA) 1台
 - (3) Co—60 γ 線線源(透視用3c及び0.2c) 2個
 - (4) 赤外線TVカメラ装置 1式
 - (5) 超音波探傷装置 1式
 - (6) 超音波探傷器 UFD—201型 1台
 - (7) 超音波式コンクリート試験器 1台
 - (8) “ 厚み測定器 1台
5. 物性測定機
- (1) 粒度分布測定装置 1式
 - (2) 熱膨張計 1台
 - (3) レオメーター(粘性試験用) 1台
 - (4) 直読式動的粘弾性測定器 1台
 - (5) 真空蒸着装置(表面薄膜形成用) 1台
6. 照明及び温湿度装置
- (1) 自動分光放射計(光源の分光測定) 1台
 - (2) ライトガイドカラーメーター(色彩測定) 1台
 - (3) 恒温恒湿槽(0°C~40°C 20~90%) 1台
7. 殺虫殺菌装置
- (1) 滅菌装置 2台
 - (2) 滅菌殺虫装置 1台
 - (3) ガス滅菌装置 GS—15特型 1台
8. 菌種保存用装置
- (1) 超低温槽(—50°C) 1台

- | | |
|--------------------|----|
| (2) 冷却遠心機 (−5℃~5℃) | 1台 |
| 9. 環境汚染測定装置 | |
| (1) 粉塵計 (記録装置付) | 1式 |
| 10. 修復処置装置 | |
| (1) 真空凍結乾燥装置 | 1式 |
| (2) 減圧含浸装置 | 1式 |
| (3) エヤブラッシュ装置 | 1式 |
| (4) 合成樹脂圧入装置 | 1式 |
| (5) 水浸木材用含浸装置 | 1式 |
| (6) 熱風恒温乾燥機 | 1台 |
| (7) 装潢用備品 | 1式 |
| (8) 万能木工機 | 1台 |

4 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であって、黒田清輝の油絵・素描・写生帳等を収蔵している。

創立当時主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帳等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」等である。目下建築工事のため閉鎖しているが、昭和53年度中には、従来通り毎週木曜午後の無料公開を再開する予定である。また昭和52年度より、黒田清輝作品の地方巡回展の予算が認められ、本年度は鹿児島市立美術館で開催した。

5 閲覧室

本研究所美術部資料室の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の閲覧者数は、延1,000名程度である。

Ⅷ 旧 職 員

昭和52年度における転退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
所 長	文 部 技 官 長	関 野 克	27. 4. 1～53. 4. 1	退 職
庶務課	文 部 事 務 官 庶務課課長補佐	鶴 見 茂	50. 4. 20～53. 3. 31	東京国立近代美術館へ 転出
〃	文 部 事 務 官 庶 務 係 官 長	本 田 耕 二	52. 4. 1～53. 3. 31	文化庁文化財保護部記念物課へ転 出
〃	文 部 事 務 官 会 計 主 任	鈴 木 吉 彦	50. 7. 1～53. 3. 31	国立極地研究所へ転出
〃	文 部 業 技 官 員	小 澤 た ま	39. 4. 1～53. 4. 1	退 職
〃	事 務 補 佐 員	杉 浦 みどり	50. 5. 6～53. 3. 30	退 職
美術部	文 部 技 官 長 第二研究室長	中 村 伝三郎	22.10. 1～53. 4. 1	退 職
修 復 技術部	文 部 技 官 長 修復技術部長	西 川 杏太郎	48. 7. 1～53. 3. 31	文化庁文化財保護部美術工芸課へ 転出

IX 関係法規

◎文部省設置法（昭和24年 法律第146号
最終改正 昭和53年 法律第55号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

- 2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

- 2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

- 3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。
- 4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

関係法規

◎文部省設置法施行規則（昭和28年1月13日 文部省令第2号
最終改正 昭和53年9月9日 文部省令第33号）（抄）

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

（所長）

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の5部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部
- 五 情報資料部

（庶務課の事務）

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術部の2室及び事務）

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつか

さどる。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の3室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の3室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の2室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

関係法規

- 2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料（写真資料を除く。）の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。
- 3 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

◎文部省定員細則（昭和44年5月21日文部省訓令第12号 最終改正 昭和53年4月5日文部省訓令第14号）（抄）

文部省定員規則（昭和44年文部省令第12号）第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省に係る行政機関職員定員令（昭和44年政令第121号）第1条に規定する定員（以下「定員令第1条定員」という。）及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員の定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令（昭和47年政令第191号）第1条に規定する定員（以下「特措法政令定員」という。）別の本省の各内部部局、各国立学校、各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は、次の表のとおりとする。

文化庁

区 分		定 員 令 第 1 条 定 員
附属機関	国立文化財研究所	145 人 各国立文化財研究所を通じての 定員とする。

- 2 各国立大学、各国立高等専門学校、各国立大学共同利用機関、各国立青年の家、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は、国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣、文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が、それぞれ、前項に規定する当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において、別に定める。

附 則

- 1 この訓令は、昭和53年4月5日から施行し、改正後の文部省定員細則第1項の規

定及び次項の規定は、昭和53年4月1日から適用する。

◎国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄）
（昭和53年4月5日改正）

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき、各国立博物館、各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	46人

附 則

この裁定は、昭和53年4月1日から適用する。

◎教育公務員特例法施行令（昭和24年1月12日 政令第6号）
（最終改正 昭和50年4月17日 第74号）（抄）

（教育公務員以外の者）

（略）

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の3〔国立大学共同利用機関〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の3に規定する機関の長及びその職員にあたっては「文部省令で定めるところにより任

関係法規

命権者」，その他の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」

二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕 第7条，第11条及び第12条については，「任命権者」

附則（昭和50年4月17日 政令74号改正）

この政令は，公布の日から施行する。

◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については，この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は，本研究所の重要事項について協議し，各部課相互の連絡をはかることを目的とする。

第3条 部室長会議は，次の各号に掲げる職員をもって組織する。

一 所長

二 各部長

三 各室長

四 課長

第4条 部室長会議は所長が招集し，その議長となる。

2 所長に事故あるときは，会議出席者の中から互選により議長を定める。

3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は，随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は，庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他，会議の運営に関して必要な事項は，別に定める。

附 則

この規則は，昭和45年1月23日から施行する。

◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程 (昭和46年3月15日所長裁定)
(昭和47年10月2日改正)

(趣 旨)

第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行う研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。

2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意義であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行うものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

(1) 受託研究は、受託者が一方的に中止することはできないこと。

(2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使用させ、または譲与することはできないこと。

(3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。

(4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を受託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。

(5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。

2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。

3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号及び第5号の条件は、これを付さないことができる。

4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行うことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室及び部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所

関係法規

長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者及び研究所契約担当職員に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室及び部の長を経て所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者及び契約担当職員に通知するものとする。

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室及び部の長を経て所長に報告するものとする。

- 2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行うものとする。
- 3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行うものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

附 則（昭和47年10月2日改正）

この規定は、昭和47年10月2日から施行する。

[別紙様式]

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により、下記のとおり
受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的及び内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

関係法規

黒田子爵記念室観覧規程（昭和12年11月29日制定）

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 1 陳列品に手を触れること。
- 2 インク・墨汁等を使用すること。
- 3 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日（10月18日）

年末年始（12月25日から翌年1月6日まで）

夏期（7月21日から8月31日まで）

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。ただし、この場合は予め掲示する。

東京国立文化財研究所要覧（昭和52年度）

昭和53年12月25日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区 上野公園13-27

電話（823）2241（代）